
半分の月の下で

半月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

半分の月の下で

【Nコード】

N7911B

【作者名】

半月

【あらすじ】

殺人を運命付けられた少年、レイ。「仕事」をこなしていくうちに段々と命の大切さが身に染みてくる。殺人という罪の重さに苛まれる心情と友情を描いた小さな物語。

プロローグ

固く黒い銃を握り締める。足元の死体を見やがりながら、荒い息を吐いた。状況を確認するため、黒いコートの懷から携帯電話を取り出し、報告する。

「こちらハーフ。只今白いビル内での仕事は片付いた。……。そう
だ場所はラクルシティ3番街。以上」

黒い瞳が虚空を睨んでいる。まるでそう報告することが忌々しいものの様に。すると、その電話の相手が機械の様に淡々とした口調で答えた。

「了解。しばらく待機しておく様に」

そう聞き取るやいな、電話は一方的に切れた。少年は舌打ちをしながら、荒々しく電話を切り、頭を掻きながら、階段を下りていった。外に出ると、風が頬をなで、夜空を舞い上がる。つられて黒い髪をたなびかせた少年も夜空を見上げた。

空には、幾つもの星があり、半月であった。

第一話 日常

自前のオートバイに乗り、アパートに帰ろうとして用事を思い出した。先程、電話で呼び出しがあった事をすっかり忘れてしまっていた。腕時計をみやり、それほど時間がない事に気付く。彼はオートバイを飛ばして、その約束している場所に向かった。

「やっべえなあ……。怒ってっかな……。…」

何度もそう呟きながら、髪を掻き耑る。普段は童顔であるその顔には、歳に不相応なしわが寄っている。オートバイは、そんな彼を乗せて夜の明るい町を駆けて行く。

オートバイは段々と人気の無い道を通っていき、ついには真っ暗な道を走っていた。そんな道を彼は辺りを窺いながら、何かを探している様に走っている。やがて目を一箇所に止めた。

そこは地味なバーであった。扉の上には入り口を心細く照らす照明が一つあるだけで、他に飾りは何も無い。ただ、白い壁に「Bar」という看板があるだけであった。オートバイを壁際に止め、扉を開けて中に入る。開けた拍子に鈴の音が店内に鳴り響く。彼は、カウンター席まで歩み寄り、マスターの目の前に座った。マスターは目を閉じて、ワイングラスを磨いている。

「いらっしやい。ハーフムーン……。いや、レイ」

「よお。我が父君の弟さん。それとも、マスターの方がしっくりくるか？」

いたずら気な笑みを浮かべ嘲笑する。その言葉に対しマスターは明るく笑って言い放った。

「はっはは。いやいや、すまない。こうやって月に一度くらい言うておかないと。俺も一応年なんぞでな、忘れちまう」

「一応、ねえ」

レイ、と呼ばれた少年は頬杖を掻き、訝しげに見る。このマスターは、一度自分の店に訪れた者の顔と、名前を覚える事を趣味とし

ている。なのでそうそうに忘れる何てこと、レイにはとても信じ難く感じられた。

マスターは片目を開き、レイを見据える。

「ところで……。用件は何だ」

「は？あんたが呼んだんだろ」

「んー。そうだったかな」

マスターはそう言って仰ぎ、しみのついた天井とにらめっこし出した。やがて「ああ」と手を打って、自分より小さい彼を見る。

「思い出した。商品を運ぶのを手伝ってもらった」

「はあ？」

「ほら……。他の奴はみんな仕事で出回ってるし……」

自然とマスターの顔には笑顔が張り付いている。レイはため息を吐き、黒髪をくしゃと掻いた。

「んなもん息子に手伝ってもらえよ」

「いや、息子も仕事で疲れてるし」

「俺だってそうだよ」

「頼むって。な」

両手を顔の前で合かし、片目でレイを見つめる。どこかその表情は自信に満ち溢れていた。「こいつなら絶対引き受けてくれる」と確信めいた目で。レイは、その表情を読み取った上でさらに深いため息を吐く。人に指図されるのはあまり好かないのだが、自然と思考が「手伝ってやろう」という方向に変わっていく。だから、嫌々ながら気だるそうに返事を返した。こんな時に、ほいほいと手伝ってしまおう自分に腹立ちながら。

「分かったよ……。やりやあいんだろ。やりやあよ……」

ガタンと、椅子をなかば蹴り倒す勢いで立ち上がり、バーの倉庫へとつながる奥の扉を開けた。その後をマスターが「いやー悪い悪い」と連呼しながら付いて行った。

☆

「おーい、ハーフ。これ四十二番に運んでくれー」

「うーす」

マスターが抱えているダンボールを受け取り、棚へと持っていく。そして目で42と書かれたラベルを探す。

「おい、ハーフ」

「ちよっと、待てって。今探してんだよ」

いらいらと返事をし、やっと探しだしたレイは、その四十二番の棚にダンボールを押し込む。慌ててマスターの元へと駆けつけて、啞然となった。

マスターの背後には、山積みになったダンボール箱が迫っていた。その真ん中でマスターは、レイの啞然とした顔を見て「あ。気にするな」と言い放つ。

「それより、早くこれ運んでくれ。これ、五十一番な」

「ちよっと待て。もしかしてこれ全部……」

「なわけねーだろ。まだ奥にもあるからな」

これの倍はあるぞ、とマスターの言葉をレイは口で反芻して、悲鳴を上げた。瞬間、一本の空になったボトルが顔にあたり、そのまま倒れこむ。仰向けのレイに、マスターの低い声が飛んできた。

「うっせーよ。今何時だと思ってる」

「よ……夜中の三時……」

「分かってんなら大きな声をだすな。普通の一般市民が起き出すだろが」

「うう……」

一人静かに泣きつつ、痛む顔を抑える。赤くなっている事が鏡を見ずとも分かった。それからずっと、マスターから指定場所を聞き、運んでいる間、これが終わる頃っていつだろう、と薄れいく意識の中で考えていたレイであった。

その後、二時間が経ち、マスターは顔を上げて「もうこんな時間か」と呟く。ふと隣を見ると、自分より明らかに年少である少年が座り込んで、虚ろ気な目を天井に向けていた。少しため息を吐くと、マスターはレイの肩を叩いた。

「もういいぞ。よく頑張ったな」

「ん……」

レイはゆっくりと瞳をマスターに向け、のろのろと立ち上がる。何も言わずに扉を開けて倉庫から出て行った。気のせいか、店の方で机が何個も倒れる音がする。この分では、机を直すのに時間がかかりそうだ。

マスターは倉庫に残り、バーの扉が閉まる音を聞いてから、立ち上がった。このバーは、昼でも営業しているので、これから店に戻らなければならない。

「うっし。仕事に戻るか」

そうばやき、あくびをしながら倉庫を出て行った。

☆

レイは、今にも閉じそうな眼を必死に開けて、オートバイを走らせた。やっとアパートの前についた頃には、ほとんど寝かけており何度も意識が飛んでいた。鍵をコートのポケットから取り出し、何度も持ち上げて落とす。やっと思いで鍵を開けると、扉を開けてその場に倒れこむ。扉の閉まる音が耳に響き、そこで意識は完全に無くなった。

目が覚めると、いつの間にかベッドの上にいることに驚いて飛び起きると、側でお茶を飲んでいる少女が気付いた。少女の空色の瞳にはレイが映り、長い空色の髪が振り返る瞬間にはねる。

「お早ーう。どうしたの、今回は。玄関口で倒れてたけど」

「また勝手に入ってきて……」

レイはがりがりと頭を掻き、寝惚け眼で少女を見る。

「いい加減にしろよ、詩衣」

「何よ、ベッドまで運んでやったじゃない。それに鍵も開いてたしー」

詩衣は頬を少し膨らまし、横を向く。その反動で、首から提げている白い石のペンダントが白衣の上で揺れた。レイはその様子にまたため息を吐き、ベッドから降りる。

「帰れ。こちらら仕事の後、マスターにこき使われてへとへとなんだよ」

「別に、いいじゃん。いたってさ」

「気が散るんだよ」

「……あつそ。んじゃ、お暇しようかな。っバーカバーカ!」

そう言って詩衣は舌を出して勢いよくレイの頭を叩く。そして、反論する前に詩衣は、自分から部屋を出て行った。

「……何なんだよ、ったく」

意外と痛む頭をさすり、そう呟く。何故あも馬鹿と言われなければならぬのか。酷く機嫌が悪くなり、やがてもう一度寝直す事にした。が、先程のお蔭でばっちり目は冴えている。「ちくしょー」とは言ってみるものの、矢張り眠くならない。

どうせ、暇だ。そのまま立ち上がったついでに台所へ行き、冷蔵庫を開ける。中身は素晴らしい程何も無い。少しため息を吐いて、買出しに行く事にする。おぼつく足取りでまた部屋に戻り、適当に転がっている服に着替えようとして、携帯電話が鳴った。

「ハーフ、仕事だ」

出たのは数時間前まで聞き慣れた声だった。

「はいよ、マスター。で、今度のはどんなのだ」

「詳しい事はバーで話す。こっちも忙しいんでね」

「了解」

半目になりつつ、電話を切る。そして浮かない顔つきで、コートの懐にある銃に装弾して、ふと何気なくグリップの部分を見た。小さな文字が彫られており、レイは静かに目を閉じる。あれからもう3年以上の月日経っている。しかし、この「仕事」にはいつまでたっても慣れない。いや、こなせてはいるのだが、この重さには慣れないのだ。

レイは、頭を小さく振った。だから、何だ。これが俺の運命ならば、ただ従う事しか俺にはできない。いつもの事だ。例え、それが誰かの命を奪う事であっても、俺の生きる道は、ここしかないのだ。

第二話 仕事 1

夜の街を一つのオートバイが走る。既に夜中であるというのに、車はせわしなく動き回り、人工的に造られた光で街は明るい。レイは、赤信号になったのを見て止めると、地図を取り出す。今回の仕事場はどこかの研究所であり、何かのサンプルを何の痕跡も残さず、サンプルを奪取する事である。

「サンプル、か。マスターはディスクつつてたっけ」

レイは、そう独りごちると、信号が青に変わると共にオートバイを発進させた。懐には幾つかの爆弾と銃が一つ。コートは既に重く、妙に今回は厄介であった。内容は、研究所の所長の暗殺に、サンプルの奪取。ぎゅっと奥歯を噛みしめる。

そもそもレイは自分の組織内では「変わり者」と呼ばれているらしい。理由を聞くと、皆口を揃えてこう言う。「殺す事を嫌がる殺し屋」だと。殺人を嫌がっているにもかかわらず、任務は必ず成功させるという「矛盾している少年」。無論、自分でも矛盾していると思う。しかし、任務には必ず成功しなければならないのだ。何故ならば、自分達の組織は厳しく、役に立ちそうもないと判断されれば、そこでそいつの人生は、強制的に終わらされてしまう。誰だって、死にたくはないのだ。それは一人に限ったことではない。だが、そのほかに、自分にはやらなければならない事があった。

気が付くと、人気のない場所へと移動しており、そこは闇が迫る森の中だった。レイは訝しんで、オートバイを止める。森の奥に、微かな光が見えたのだ。オートバイから降りると、コートから銃を取り出し、音を立てぬ様、慎重な足取りで光の元へと走る。

その光の元は、寂れた研究所であった。ちらほらと見える光が、哀愁を漂わせている。

「んー。こんな所にあんのか、例のディスクってやつは」

そう呟き、内部へと侵入していく。しかし、その研究所は監視が

いないのか、少年が入ってきてても、人っ子一人出てこない。少し呆気にとられながら、ゆっくりとした足取りで地下へと進む。いつ敵が飛び出してきてもいい様に。

やがて、最下層の奥にある扉へと、無事に行き着いた。扉にあるドアノブを、ゆっくりと慎重に回して銃を構えた姿勢で押し入る。すると、中には誰もいない様子で、何も飛び出してきたりはしなかった。それでも警戒は解かず、卓上にある、一枚のハードディスクを手取る。そして、そのディスクをコートにしまい込むと、レイは、ほっと胸を撫で下ろした。出て行こうとした途端に、全部屋に備え付けられている警報機が、一斉に鳴り出した。小さく舌打ちし、慌てて走り出すが、全部屋から一斉に銃を構えた、自分と同じ奴らが飛び出し発砲すしだいたした。

再び舌打ちし、ただひたすら突っ走る。出来るだけ被害を最小限にし、傷を受けない事。そういう最低限のことを守り、実際それを守りながら、仕事をこなした事だである。しかし、今回は、流れ弾がレイの頬を掠り、左腕を、鉛の弾丸が肉を引き裂き、貫通した。撃たれた左腕からは、血が勢い良く流れ、左手に滴り、床に付着する。

「ぐ……っ」

痛みに顔を顰めるが、右腕で、一人を銃で打ち抜く。短い悲鳴と、乱射する音だけが、研究所内に響き渡った。夢中で走りながらもまた一人、二人、三人と撃ち殺していく。やがて、廊下には、血溜まりと、その中に映った、虚ろ気な顔をしている少年だけが残った。その少年の、既に露出している顔や手は返り血や傷で、真っ赤に染まっている。

レイは、ぞわりと背中毛が逆立つのを感じ、「ああ、またか」と思った。こういった殺人を何度か繰り返すとき、いつもの様に「裏」が出てくるのを、この十年間で知った。そして、決まって自分は、その時を覚えていない。気が付けば、そこには屍しか残ってはいないという惨事になっている。

「まだ……。人は……。イル……」

立ったまま意識が朦朧としたすと、視界の片隅に曲がり角から敵が襲い掛かるのが映った。

『サア、交代ダ』

頭の中で、そう幼い男の子の声が響くと、完全に「表」の意識は失われ、幾つもの銃弾がレイの元へと飛び込んできた。

第二話 仕事 2

「フン。どうだ？そちらは」

白衣を纏った男は、無線機で会話のやりとりをしている。すると、その無線機の向こう側から、少し年をとった男の声が、聞こえた。

「目標、ほぼ死亡したかと思われます」

「そうか。では、死亡の確認後、引き続き監視を頼む。」

そう言って、不気味な笑みを浮かべて無線機をきった。男は科学者らしく、背後にある大きい円筒状の培養槽に、手を添える。堪えきれない充足感が、口元に現れた。

「もう少しで、こいつを……」

中にいる獣の姿をした者は、小首を傾げた。まるで、外の声が届いているかの様に、しばらくして頷いた。男はその様子に満足し、培養槽から離れる。と、途端に無線機から通信が入った。煩わしうに、スイッチを押し、耳元に当てる。

「何だ」

「たっ、タッ……大変です！目標は、現在そちらに向かっております！」

「なっ！？何をしている！？早く阻止しろ」

「それが……、このフロアには、僕と教授しか」

「何てことだ。……っでは？目標は」

驚く顔が一瞬にして強張り、恐る恐るといった風に聞き返す。すると、部屋の扉が開き、目標が顔を見せた。無線機のアンテナを持ち、ぷらぷらと左右に揺らす。

「現在、司令室到着。目標、ターゲットかくにーん」

頬にかすり傷をつけたままの少年は、おどけた様子で無線機を離す。そして、にっと笑うと、銃を持った右腕を上げた。男は未だに驚いたまま動かず、自分の声が震えているのにも気が付いていない様である。

「貴様……どうやって」

「んー。どーだっていいじゃん、んな事あよ。どうせ死ぬんだし」
「……っ」

レイはにやにやと笑ったまま、引き金に指をかける。

「ま。ちつと時間やるよ。後ろに、監視カメラがあんだろ？ 見てみな」

男は、恐怖心のせいかゆっくりと振り返ると、監視カメラの映像を、巻き戻し再生する。カメラはキュルキュルと音を立て巻き戻すと、再生しだした。

第二話 仕事 3

「何だこいつ」

男が呻いた。真っ白な廊下に少年が、硝煙の中に立っている。少年は笑ったまま壁に手をやり、何かを壁に押し付け、そのまま少年は、壁に曲線を描く。その真っ白な壁に真っ赤な血が、描かれた。男は慌てて後ろを振り返る。

「リュート、増援を」

「バカ、後ろ！」

次の瞬間、男は首から上が切り離された。首は中を舞い、体はバランスを失い、二つとも床に崩れ落ちる。その勢いで、血は流れだし、リュートと呼ばれた男の足元で、血は勢いを失くした。

「う……っわあああああ」

リュートは持っていたマシンガンを連射し、たった一人の少年に恐怖した。自分より明らかに年下な筈なのに、自分とは違う生き物に見える。何かは分からないが、本能的に恐ろしく感じた。

「落ち着け、リュート！」

「あああああああああ！」

数人の男が、リュートを取り押さえる。親玉と思われるような男は、怒鳴り散らした。

「二番隊は前へ！三、四番隊は構え！」

たかが、少年だ。どんなに凄いやり方をしていても、結局はどこかでボロを出す筈だ。男はそう自分に言い聞かせ、無理矢理納得させる。

「撃てっ」

そう言っ、ぎくりとした表情になった。笑っている。こちらを見て、呆れた様な笑みを浮かべて腕をだらんと下げている。まるで、相手にするのもバカらしいというかの様だ。と、その瞬間、何人もの男が、壁際に打ち付けられていた。壁は一気に赤く染まり、その

真ん中を、少年がゆっくりとした歩みで、近付いてくる。

『ぬるいなあ』

その場にいた男達は、一斉に恐怖心だけで、乱射を始めた。と、また前線にいた三番隊が、壁に打ち付けられる。その事に、変化があるとするば、皆がバラバラになって、上空から勢い良く床に落ちてくる事だ。少年は側にあつた人の首というトマトを踏み潰し、血の海を歩いて渡る。

ふと男は、少年の両腕を見て驚いた。その腕は、毛がびっしりと生え、まるで獣の様に太く、鋭い。そして、その腕にもまた、どす黒い血がこびりついている。

その様子に、残った計十二名は、慌てて銃を捨て、我先にと走り逃げようとした。だが男は、そこから一步も動かない。少年の赤い瞳を見つめ、ただただ、震える事しかできなかった。

『おおー。三十六計逃げるにしかずつてか。……っハハハ。甘えんだよ。バカ共が』

強い風が吹き、男の脇を、黒く太い腕が通り抜けていく。男を残し、皆は胴体を失った。次に、太い腕は、一人一人の腕を床に叩き落す。それは、さながら水の入った風船を、叩き割っている様にも見えた。

あつという間に、真っ白に飾られていた研究所は、真っ赤に染まりあげられた。男は、ぎぎぎと首を回し、やっと見ると、幼い声色にびくりとする。

『おお。ここにも』

「頼む……っ助けてくれ……っ」

震える体を必死に抑え、震える声で頼みこむ。少年はふふんと、鼻で笑うと両腕を頭にやる。

『ま、別にー。いいけどね、皆殺しじゃなくても』

男はそれを聞くと、内心、助かったのだと喜んだ。が、その思いはすぐに途切れる。少年の腕が、いつの間にか元に戻り、代わりに銃を持って、引き金を引いていた。一瞬の静寂が訪れる。

『こいつがどうか知らな』

「俺としちゃ、殺さなくちゃいけない」

男は、かろうじて動く目玉を動かし、少年の顔を見た。そこには、辛そうに顔を歪めている幼い顔があり、それを見て男は不思議と口元に笑みが広がる。これまで自分は最後まで人を傷つけた。そんな奴に似合う死に場所は、どうやらここだった様だ。そんなことを考えながら、息子より小さな少年を視界から切り離す。僅かに動く唇で、お先にと呟く。

男はぼしやりと血溜りの中に崩れ落ちると、静かに夢を見始めた。永遠に目覚めることのない夢を。そこに、かつて少年だった自分がいた。

第二話 仕事 4

「分かったかな」

「ああ……」

「そんなじゃ」

「お前を殺す方法がなっ」

男は、勢いよく培養槽を叩き割ると、すぐさま机の裏に隠れる。

レイは、舌打ちをして、発砲するが間に合わない。諦めて培養槽から出てきた物に注目した。出てきたのは、一見ただの男の子の様だが、あらゆる毛という毛が獣毛である。目が半眼で、赤い瞳に自分が映った。肩までかかった黒髪が、風に靡く。

「ヴァア……」

そいつは、あどけなさを感じさせる様に小首を傾げ、やがて、机の裏に隠れている男の声を拾った。

「殺せ」

瞬間、素早く二人が動く。そいつは、左手で右手をさっと触れる。すると、そいつの腕はみるみる変形し、次の瞬間には一本の鋭利な固い刃物になっていた。レイはそれを確認しつつ、銃の照準を合わせる。いかなる時でも冷静さを欠いてはならないと、仲間に教わってからいつだって自分は、冷静になる様に努めてきた。ここで攻撃をする機会を逃せば、自分が死ぬ。

そいつの腕が素早く、レイに向かって伸びてきた。僅かに体を反らしてその『攻撃』を避け、間髪いれずに、銃をそいつに向けて発砲する。そいつは、多少驚いた顔をしたが、すぐにきっと向き直り、弾丸が当たると予測される体の一部を、酸にかえて溶かした。だが、どうやら直ぐには元に戻せないらしく、少し焦った表情がそいつから見える。やっと酸から元の腹に変えると、すかさず突っ込んで接近し、銃をそいつの腹に当てて撃った。ぐじゅり、と内臓が引きちぎられる音が聞こえる。

「ガ……ッ！」

そいつは、顔を歪めて出血している腹部を抑えながら、蹲る。生まれただけで、経験が浅いらしく、なかなか立ち上がろうとしない。いや、立ち上がれないのだ。レイは、冷ややかにそいつを見下ろすと、額に銃を当てた。

「立てよ。まだ、生きてんだろが」

「ウギユウ……ガ……？」

冷たいものが、額に強く押し当てられるのを感じたのか、不思議そうな声を発する。恐らく事の実況が分かっているのだろう。額と接する場所には、汗が出ている。無表情のまま撃った。

「ギャウウウ……ッ」

銃から煙が立ち、そいつは額を手で押さえて、もんどりうつ。まるで人間の様で人間ではないそいつは、ある人物と似ていることに気づき、頭を振る。取り繕うように質問した。

「立て。教授はどこ行った」

「キョー……ジュ？」

「そうだ」

「ン……」

そいつは、額から手をのける。見ると、額がみるみる内に修復されているのが分かった。それでもまだ痛むらしく、しきりに擦っている。小さな男の子らしい声が耳に響いた。

「誰。ソレ」

「さっきまでここにいた男だ」

「……アア、ア。オトーサン」

そいつは嬉しそうな顔をして、こちらを見ている。まるで五歳児の様だ、とレイは思った。人間離れをした五歳児。

「アのね、オトーサンね、お仕事でね、いないの。ボク、お留守番なの」

「あ、そう。んじゃ、お父さん捜すから」

レイはそう言って部屋を出て行こうとし、振り返る。幼い獣が、

コートの裾を引っ張っていた。

「ボクだけじゃつまんない。連れて行って」

驚いて、眼を丸くする。先程までかたことであつた言い方が一瞬にして、自分の知りえる人物と重なった。それも確実に。ちょうどこのくらいの歳で、自分はまだ歩めぬ道へといつてしまった兄弟の名を口にした。

「……レキ」

レキ・ラースト。レイの弟であり、先に逝ってしまった幼子。いつも自分の後ろを付いて回り、しがみついていたけれど、芯が強く、ある意味レイよりしっかりしていた心配性な弟。

それが、今になってこういう形で再現されるとは。が、気のせいだと自分に言い聞かすように軽く頭を左右に振り、ドアノブを廻す。男には、あらかじめ机の裏に隠れられる前に、小型発信機をつけておいたから、あるいは……。

「お兄ちゃん」

肩がびくりと震える。声までもが、弟に似てきていた。思わず耳を塞いでしまおうとするが、その途端に過去が凄まじい勢いで蘇ってきた。初めて出会ったときの弟の笑顔、泣き顔、そして。

「何で……。今になって……っ」

「お兄ちゃん、どうしたの？」

レイは、耳を強く両手で塞ぎ、その場に座り込んで何度も頭を左右に振る。今はこんな事をしている場合ではないのに。仕事をこなさなければならぬのに。そう思った瞬間、腕が熱くなった。左腕に幼い獣の腕が突き刺さったらしい。

慌ててそいつの腕を掴んで引き抜き、そいつの瞳を見る。いつの間にかそいつの瞳は、濁っていた。どうやらこいつの攻撃は、こいつの意思によるものではなさそうだ。舌打ちをしようとして、唾じやなく血が吐き出されるのを想像し、止める。

「目標捕捉。レイ・ラースト」

「……くそっ」

転がるように部屋を出た。すると、すぐその背後で、鋼の腕が壁に突き刺さる。先程の戦闘より、獣は、素早い動作で次々と仕留めにかかってくる。

「まずいな……」

『ハッハー。代わろうか？』

自分が耳元で甘い声をして囁く。苛立ちながらも、その声を無視する。

『お前だってやばいと思ってんだろう？なら何の問題も無えじゃねえか』

「嫌なんだよ。殺したくない」

『でも、あれは人じゃ無えぜ？』

「うるさい」

非常用階段を駆け下り、ちらと後ろを窺う。瞬間、自分の横にある壁が砕けた。慌てて駆け下りるスピードを上げる。このままだと追いつかれるのは時間の問題だ。焦って階段から落ちそうになりながらも駆けて行く。すると、またそのすぐ背後で、鋼の腕が壁を壊した。自然と冷や汗をたらしながら、階段を降りようとする。ふと鋭利な腕が迫る気配がして、すぐ頭を下げる。その直感は当たり、頭上を腕が通り過ぎた。その間にも二人の自分との会話がなされる。

「まさにデッドオアアライブだな」

『冗談言ってる場合か？あ、でもその冗談面白えーな』

「お前もろとも死ぬけど」

ふと、階段から足が浮く。レイの腕に、獣の腕が突き刺さった様だ。そのまま体は持ち上がり、階段からそのまま一気に下の階まで床に体を叩きつけられた。仰向けの姿勢で落下したためか、背中から激痛が走る。腕からは大量の血が流れ出す。意識が定まらず、感覚は、既に腕が自分の腕から引き抜かれる事しかわからない。薄れゆく視界のなかで、赤い弟の姿が見えた。

『GAME OVERだ。諦めな』

嫌だな、と呟く。そもそも、この人生と言うゲームにリセットボ

タンなんてものがあるのだろうか。そう思った瞬間、意識がなくなり、もう一人の主人公が現れた。

第二話 仕事 5

気が付くと、弟に良く似た物体が転がっていた。赤い海に顔面を浸し、浮き上がってこない。体ともいえる場所には、無数の弾痕がある。

レイは、最早無表情ともいえる顔で、じっと赤い血溜りの中にいる獣を見つめていた。数分の間そうしているかと思えば、突然おもむろに口を開く。

「ごめんな」

謝罪の言葉が口をついた。自分には他人の命を奪う権利がないから、謝る。その考えは臆病だ、とよく仲間からも言われるが、自分は本当に臆病なのだから、仕方が無い。だからといって、奪う権利があれば殺しても良いということでもないのだが。

『ったく。面倒くさい生き物だな、お前って』

「お前が単純すぎるんだ」

レイは弱々しく扉を開けて、携帯電話を取り出す。一のボタンを押して、現在男のいる居場所を突き止める。その携帯電話を片手に持ちながら、もう片方の手で先程穴が開いた腕を押さえた。

相も変わらずそこから出血しているが、包帯を巻いておいたのでしばらくは心配しないで良い筈だ。問題なのは、痛みである。必ずしもこの痛みは、何をするにおいても邪魔になるだろう。

「しくじったな……」

『なんなら俺が代わろうか？』

笑い声が頭の中で木霊する。無理矢理無視して、オートバイにまたがるとエンジンをかけた。低く重い音がし、やがて、オートバイは、森の中を疾走する。

『暇なんだよなー。お前は話しちゃくれねえし』

「俺がお前に喋ることになったら死ぬときだ」

『無理すんなよー。あ、それともその時って今か？』

「まだ生きてる。勝手にその時を作るな」

『あーあ。つれねえなあ。何でこんな奴に彼女がいるのか全く分かんらん』

「安心しろ。俺も分からん」

『駄目じゃん』

一見会話をしている様だが、やっぱり頭の中の声が外に聞こえる筈もなく、周りからは奇妙なものを見る様な目で見られた。しばらくレイは黙っていたが、すぐに携帯電話の画像を見て、目的の事だけを考える。現在、男は一つのところに止まっているらしく、発信機は動いてはいない。男はこのビル街の近くに潜んでいるらしい。

オートバイにブレーキをかける。

「ここか」

目の前にある＜株式会社 中澤不動産＞を見上げ、呟く。すると、呟いた所為か傷を負った腕が痛んだ。顔を顰め、腕を右手で抑える。実のところさっきからずっと痛んでいた。割と限界は近いのかも知れない。レイは自嘲の笑みを小さくもらすと、そのままそのビルの中へと入っていった。

中は、意外とこじんまりとしており、人一人いないのかと思う程である。逆に静か過ぎて耳が痛い。携帯電話の画面を見ると、発信機は動いておらず、男がここにいることを示していた。

「諦めて出てきな。中澤 忠士」

自分の声だけが部屋の中で響く。と、どこかでゴトリと物音がし、反射的にレイはそちらへと銃を向ける。真向かいにあるカウンターに向こうに、男、中澤がいた。

「……しつこいな、君は」

「悪いが、こちらら仕事なんでね」

「その仕事で殺されるのか？ 私は」

「ま、そういうことかね」

妙に空気が張り詰めている。ここで改めてレイは、この男が怪しく思えた。下手したら自分に殺されかねないというのに、この男は

自信に満ちた顔で平然とそこに立っているだけである。

「ところで、私の息子はどうした」

「さあ。海にでも溺れてんじゃない？」

ここで、男の表情が崩れた。怒りと憎しみのこもった目で、こちらを睨む。

「貴様……アッ！」

「俺に怒るのってお門違いじゃない？」

『俺だしな』

「あ、じゃあ間違っていないのか」

「死ねえええええ」

男が、ナイフを取り出し、こちらへと走りよってきた。レイは素早く銃の引き金に指をかけ、躊躇する。

泣いていた。思わず罪悪感を感じさせる気迫で、男は殺意を抱いていた。その様子を見て、ある思いが沸く。それは羨望であった。

———俺の親父とはえらい違いだな———

ナイフが、自分の肩に刺さる。続けて男は、訳の分からない事を口走りながら何度も何度も刺した。何度も何度も、レイの肩に刃を突き立てる。このまま殺されてみるのも悪くないなど、激痛の中、ふっとその考えが浮かんだが、本能がそれを許しはしなかった。

片足で男を蹴り飛ばすと、自分もナイフを取り出し、ゆっくりと歩み寄る。男がまた泣きながら、ナイフを突き立てようと走り寄ろうとして、その動きが止まった。あとはナイフを持つその腕を振り下ろせばレイの肩に届くところで、レイのナイフが、男の心臓を引き裂いていた。男が、スローモーションの様に倒れたが、まだ息はあるようだ。レイは、しゃがみ込んで、先程男がしていたように何度もナイフを突き刺す。血が床やレイの頬に飛び散り、流れた。

「いいなあ……。死ぬことができて……」

何度も何度もそう呟いて、ナイフを突く。どこかその瞳は空ろであつた。気狂いの自分が笑う。

『ひやははは。この気違い』

「いいな……」

闇の中、ただ少年の声しかない。月は、少年と屍を煌々と照らしていた。

翌日、あとには血まみれ死体しか残っていなかったという。

第三話 仲間

あの仕事があった日から、レイはずっとうなされていた。最近はまだ自分が十三になったかならないかという頃の夢まで見るようになり、ほとんどが眠れない日である。睡眠薬でも飲んでみたらいいのだが、あれは癖になるのでなるべく避けるようにしたい。

仕事もあれ以来、まだ来ない。レイは安堵ともに、不安を覚える。もしこのままこの状態が続けば自分はいったいどうなるのか。何かきっかけが欲しかった。

そんな時だ。同業者と出会ったのは。朝方、河原をぶらぶら散歩していると、背後から声をかけられた。どことなく聞いた事のある声である。

「あのー。すいまっせーん」

「あ？」

振り返ると、自分と同年と思われる少年がそこにいた。アルシヤル・モーナットである。

「お、やっぱレイだ。」

「アル。お前いつの間にかここへ？仕事はどうしたんだよ」すると、アルシヤルは笑って、レイの肩を軽く叩く。

「今時、上級者の中で真面目にやってるのは、レイぐらいだよ」

「うるせーよ。俺はお前を思って言ったんだぞ」

「大丈夫だって。そう簡単には背かないし。それにもう終えてしばらく休暇」

「待機命令か」

「そゆこと」

そう言っただけでアルシヤルは、へへへと笑った。アルシヤルとは、旧知の仲で、唯一弟の存在を知っている。ただし、弟が死んでいるとは知らない。あの三年前の弟が死んだ時以来、仲間とは一切会えずにいた。急に仕事が忙しくなったのだ。

しばらく二人は昔話をして、一緒に散歩した。土手近くを通りかかる。

「ここで、レイが昼寝していたのを最初に見かけたよな」

「ああ、正直言ってお前、ウザかった」

「ひどっ」

「冗談だよ」

『まあ、でも。それに近い事はあるがえてたよな』

レイは無理矢理笑って、アルシャルの背中を思い切り叩く。その勢いでアルシャルは前かがみに倒れそうになった。慌てて謝ると、アルシャルは、少し困った顔をして笑う。

「変わってないなあ、レイ」

「万年お節介焼き野郎に、言われたかねえよ」

『違えよ。あいつはお前の気狂いのこと言ってるだよ』

また意地悪そうな声が頭の中でする。レイは、その声を振り払い、無理矢理アルシャルがいる現実に戻った。

「で。他の奴等は」

「みんなバーにいるよー。珍しくシアンは休暇がとれて怒ってるけど」

「相も変わらず……。仕事熱心なこと」

ふと、眼を細めて淋しげな表情になる。一体、どこまで従兄弟の手は、どう黒く染まっていくなのだろう。自分とほぼ変わらぬ歳であるが、恐らくあいつの方が染まっている筈だ。人のことは言えないが、同情の念と疑問が沸いてくる。

「そーいや、弟君元氣ー？」

「……ああ」

『嘘付け。元氣もクソもねーだろが』

「元氣だ」

必死に笑ってアルシャルを見た。上手く悟られていなければ良いが。しかしアルシャルは、そんなレイの様子に気付いてか気付いていないのか、ただ単純に「なら良かった」と笑った。

「んじゃ、早速バーに行こう！」

アルシャルは、レイの手を掴むと、清々しい朝の土手を駆け抜ける。首もとの紐が風に揺れ、ひらひらと舞う。

自分たちが所属する組織には、仕事の際、個人個人の制服の着用が義務づけられている。レイの場合は、自分の希望もあって黒いコートだが、アルの場合は黒いコートで、首元には黒く大きなボタンとそこから長い紐が左右にでている服だ。因みに、シアン・ヒヤドラムは、丸いボタンで止める服で、左右に線が入っている。後ろで余った紐を結んでいる為、左右で紐が長い、変わった服だ。

「覚えてつか？いつか皆で仕事したとき」

「あー。あの訓練最後の日か」

「椎羅^{つらい}、自分から罠にはまりまくってたな！」

「そりゃ、お前もだろ」

「むっ！？椎羅よりは少なかったぞ！」

「俺とシアンだけだったな、はまらなかったの。あ、そういや呆れて放っていったこともあったっけ」

レイは苦笑いを浮かべて、地面を見る。あの時を乗り過ごしてきたから、今、ここにいます。そんな当たり前の事を改めて思う。シアンはいつでも単独で動きたがり、アルはいつだって笑ってそこにいた。椎羅は、一つ年下だからなのか、背伸びをして、その結果皆に迷惑をかけている。では、自分はどうかだったか？

「……」

気が付くと、いつの間にか自分達はバーの中に入っていた。朝も早いというのに、店は既に開いていたらしく、カウンター席に、一回り小さい少女が、ビールジョッキを片手に、隣に座っている少年に話しかけている。

「だあかああら……ヒック……あの回は美智子となア……」

「うるせーよ！もう既に息が酒臭えぞ、コラ！！」

少年は、こめかみに右の人指し指を当てて、青い筋を浮かばせていた。シアンと椎羅である。そこに空気の読めないアルシャルが加

わったものだから、余計に事態が収集のつかないこととなった。

「やゝ、お待っとうさゝん。レイ連れてきた」

「遅いぞ！馬鹿アル！！そこに座れえー、ヒック。……今日はとくとお……美智子の素晴らしさお……」

「馬鹿って何だ！馬鹿って！！訂正し直せ」

「うるさいっ。ヒック。……ぞっ！！」

「いや、お前ら二人ともうるさいから」

「だな」

レイは失笑しながら、椎羅の隣に座っているシアンの隣に座る。カウンター席の椅子がくると回った。シアンは頭を掻くと、深い溜め息を吐き出す。

「だな、どころじゃねえよ。止めろよ」

「へー。お前、この一方的な喧嘩の仲裁にはいれるのか。いやー、凄えな」

ちら、と二人は、常備している包丁をビビるアルシャルに向けて、酒臭い息で熱弁する椎羅を見る。二人とも一様に押し黙り、眼を閉じた。無理だ、と判断したのだ。二人ともさりげなく別の話題をしようとするが、何も出てこない為、口を開けては閉じている。

そんな中、救世主が現れた。ひょっこりと奥の扉から、シアンの父が顔を出す。

「おや、何やら騒がしいと思ったら……。懐かしい顔があるじゃないか」

「あつ、マスター！助けて！！刺される！」

アルシャルが涙目でそう訴えるが、マスターは豪快に笑っただけで中に入ろうとはしなかった。それより、と顔をレイに向ける。

「どうしたんだい？こんな……朝っぱらから。宴会？」

「いや。俺にもさっぱり」

「この野郎っ！ハイパー無視すんなコラッ！！」

「おいボケナスアルシャル！ちゃんとお……聞いて……」

と、途端にがたんと盛大な音を立てて、椎羅がカウンターに突っ

伏した。

「なあ」

「ん？」

「椎羅って俺らより下だよな？」

「ああ」

「何で酒飲んでる奴より俺は背が低いんだ？」

レイは、片手で顔を覆いつつ、隣にいるシアンに聞く。だが、いつも決まって曖昧な返事しか返ってこない為、ややふてくされ気味に呟く様に。

「牛乳を飲まねーからじゃね？」

思った通りの答えが返ってきてがっかりする。レイは、拳を顔の前にもってきて熱論しだした。これもいつもの事である。

「俺は、牛乳が嫌いな。飲み物ならもうちょっとこう……スーッとする感じの」

「それならスポーツドリンク飲め。アクエリ阿斯とか」

「ばっか。そんなんで大きくなれるかっての。第一試してみたけど、何の効果も無かったぞ。それに牛乳は、カルシウムが」

「ンな事より、二人とも助けてくれよ！死に掛けたぞ！！」

アルシャルが割って入るが、そんな事にも構わずレイは語り続ける。そんな一方的な会話の中、マスターは微笑みながらそのいつもの光景を眺めていた。アルシャルとしては、いい迷惑である。アルシャルは人知れず、深い溜め息を吐いた。

第三話 仲間 2

しばらくレイが皆に語っていると、背後で扉の開く音がした。マスターがニコニコしたままそちらを見て、一瞬に顔が強張る。

「伏せろっ」

その声で、四人は一斉に椅子から降りて各机の下に転がり込んだ。アルシャルは椎羅^{っいら}を抱えて、シアンはマスターと一緒に机下に。慌ててレイが、机を蹴ってバリケードを作る。と、次の瞬間、五人がいた場所に爆音が響いた。どうやら敵であるらしい。武器は恐らく爆薬と何かだろう。

コートから銃を取り出し、狙いを定めようと机から身を乗り出す。だが、それより速く数本のナイフが、シアンがいるであろう机から飛び出した。二本のナイフが、敵の爆薬を持っている左手と右足に、突き刺さる。突き刺さった左手と右足からは、真っ赤な血が吹き出し、壁を汚す。

「……っ!？」

短い悲鳴が部屋に響いた。続けて、椎羅を抱えて机下に潜んだアルシャルが、いつの間にか槍を手にとって敵に突っかかっていき、そのまま槍の切っ先を、敵であろう人物に突き出した。

「無駄な抵抗は止めておけ。このまま首を貫くぞ」

外見とは打って変ったような低い声音でアルシャルは囁く。相手は、パークーのついた服を着ている、顔を除けばどこにでもいそうな人物であった。しかし、顔立ちはまだ幼い様である。見た目は17・18といった所だろう。しかし、その口から発せられる声は、見事な成人男性によるものであった。

「ボルト、か？」

「さてね。お前はどこの者だ？返答しだいでお前を殺すぞ」

アルシャルは優しく微笑みながらもそう呟く。これは、アルシャルの得意とするものであった。笑顔という凶器を身につけ、相手が

自白するまでその凶器で問い詰め続ける。それがアルシャル・モーナット。コード名は、「ボルト」。槍を突くスピードが速く、また、動きも素早い為、この名を与えられたことが由来であるようだ。

「けっ。……こんなチビに」

「うっせー!! 手前は牛乳が飲めるってか? 飲めんのか!?!」

勝手に反応して反発するレイに、男は一瞥をくれてやるだけで、またすぐアルシャルに向き直る。

「真面目に答えろ。返答次第では殺すと言った筈だが」

槍の切っ先を、首に食い込ませる。それだけで男は押し黙り、そっぽを向く。アルシャルは、無言で刃先を手の甲に目指して、突き刺した。男が痛みに顔を歪めるが、アルシャルは、ただそれを冷ややかに見下ろすだけで、一步も動じない。

「次は手首だ。早く言わないと首に到達するぞ」

不意にその言葉を耳にしたレイは、気持ちが悪く感じた。いつの間にか、虫も殺せなかったこいつまでもが、犯罪者となってしまっていたことを、今更ながらに感じる。あの、気持ちが優しく、人を傷つけることを誰よりも恐れていた子供は、もうそこにはない事を、先程の言葉が語っていた。

「わ……分かった。……オリオン。オリオンの組織に属する末端だ」

「オリオンだと!?!」

マスターが声を荒げて、男の顔を凝視する。「どうした、マスター」とシアンは敢えて「親父」とは呼ばずにそう聞く。マスターは、その事にも気付いていないのか、少し青ざめた顔で呟いた。

「最も俺たちの組織に近い、大規模な組織だ」

「へえ。で? その構成員が何の用だ」

シアンは、思わず背筋がぞくりとする程の冷たさを瞳に湛え、男を見る。

「お前たちを、消すように……」

すると、今までアルシャルの横で寝ていた椎羅が、目を覚まして辺りを見渡した。あまり、状況が把握できていないらしい。気の抜

けた大あくびをして、目を擦る。

「……騒がしい朝だなあ。ん？こいつ何？」

今だ寝呆けなまこの椎羅に、レイは横目でみやり呟く。

「オリオンに属する末端の構成員」

「は？敵？」

「まあ、俺たちを殺そうとしたんだからそうなるか」

「見くびられたもんだな、レイ」

椎羅は、まだ幼さが残っている笑顔を、男に向ける。が、その笑顔には、どこか暗いものを感じさせた。

「で、どーすんだ？」

「店の外に出よう。外の空気が吸いたい」

レイは、そう言うと言の両腕を後ろに回させて、立つように促す。そうして彼らはマスターを店に残して外へと出た。

店は、人気のない裏路地にある為、店から出てもあまり明るくはない。不安の色を隠せない男は、後ろにいるレイを目だけで見る。

「で、俺をどうするつもりだ」

「別に。あんたの手伝いをするだけだよ」

「？何の」

レイは、着ているコートから銃を取り出し、男の背に銃口を押して当てる。

「輪廻転生の、な」

パスツと間拔けな音がし、男の胸からどす黒い血が噴射する。消音銃である為、あまり周囲には気付かれない。そのままレイは、男を突き倒し、地面に倒す。そして、あたかも自殺であるように見せかけ、片方の手に消音銃を持たせた。

「さて」

一同は、足早にその場を去ると、当てのない散歩をする。

「しっかし……レイ。お前って輪廻転生とか信じる性質たちかよ？」

「そういう椎羅はどうなんだ」

「オレア、信じないね。きりがねえしな、そんな事考えても」

「僕も信じないな。ていうか考えたことがなかった」

「シアンは？」

「……そういうのはただの概念だ。信じる信じないは人による。ま、結局、どっちだっていいだろ。そんなもん」

「ちっ。つれねーのな、シアン」

「深く考えすぎなんだよ、お前は。昔から」

「あー、そうそう！単純な計算式でもややこしい数字使ってたたりしてたよなー！」

「なっ！？椎羅だって漢字練習のとき、間違えた漢字のまま練習して、居残りさせられてただろーがっ」

「何だとコラァ！！」

いつの間にやら彼らは、土手の近くまで来ていた。椎羅はどこからともなく包丁を取り出すと、ゆっくりとレイに歩み寄る。

「小便は済ませたか？神様にお祈りは？醜く震えて命乞いをする心の準備はOK！？」

「え……ちよっ……」

「ぶっ殺しオツケーエエエエ！！」

「ひっ……いああああ！止めっ、危なっ！」

包丁が飛び交う音と、悲鳴がその場を支配する。土手から走り去るレイを、椎羅は笑顔で追いかけていく。その後を、アルシャルとシアンは顔を見合わせながら追っていた。

第三話 仲間 2 (後書き)

えー、最近受験という名の怪物が迫ってきているので、投稿が遅れがちになると思います。ご理解願いたいと思います。

第三話 仲間 3 (前書き)

やっとこの辺りで主要キャラクターが全員登場してきました。これまで読んでくださっている方々に、感謝です。では、本編をどうぞ！

第三話 仲間 3

景色も変わった頃には、走り疲れたレイが、その場に座り込んで息を整えていた。するとすぐに椎羅に追いつかれたが、最早視界に映っていない。二人とも、土手の草むらに座り込んだ。

「へっ。体力落ちたな？ レイ」

「うる……っせ。お、前が。異常……」

「テメツ！ まだ言うか！？」

椎羅が再び包丁を取り出そうとすると、後ろからその手を掴まれた。

「いい加減にしとけよ。もう十分じゃねーか？」

「……ちっ」

椎羅は舌打ちすると、包丁をしまい、川辺の方を向いて口を開ける。

「……どーすんだよ。殴り込みすんのか？」

「誰がそんな事するっつたよ。無視だ無視」

「鬱陶しくないか？」

「うるっせ。無視してたらあっちも、ちよっかいださねーだろ」

レイは目を閉じて、そう言い放つ。その様子にアルシャルは、幾らか安心した様で、安堵のため息を吐いた。

「そうだよな。あっちもたまたま僕らの事が目に入っただけかも」

「確信はないがな」

冷たくシアンがそう言い放つ。と、その後ろ側で、女性の声がその場を響かせた。

「おーい」

振り返ると、空色の瞳を苛立ちに歪ませた少女が、買い物袋を提げてこちらへとやってくるのが見えた。椎羅が、反射的に回れ右をして一気に駆け出そうとする。が、その前に詩衣の腕が、椎羅の腕を掴んだ。

「詩衣？どうしたんだ？……こんな朝早くから」

「それを言うなら、あんた達も、でしょ？ねー？椎羅？」

にこりと自分に背を向けている椎羅へ笑顔で聞くと、椎羅はびくりと肩を震わせ、ぎこちない動作で振り返った。気のせいかな、うっすらと冷や汗が額を伝っているように見える。そのまま朝日を背に立っている詩衣に、ぎこちない笑みを返す。

「あ、ああ。そう……うん、まあ」

「で？時に君は何をしているのかな？お姉ちゃん、妹が帰ってくるなんて聞いてなかったんだけどなあ？」

「ああああ、あのー……。で、電話が繋がらなくて！」

「ずーっと携帯電話のアンテナは立っていたんだけど？」

「え、えと、あー。時間が……」

「へえ？レイと追いかけてっしてて？」

「うっ！」

どんどん詰め寄ってくる姉に気圧された妹は、ばつが悪そうに顔を背ける。どうやら、こいつにも頭が上がらない奴はいららしい。いつも何かと苛めている相手が逆に追い詰められている様子は、どこか滑稽に見える。そんな椎羅も、とうとう謝った。

「ご、ごめん……」

「え？語尾まできちんとしななきゃねえ？」

「ご……めんなさ……い」

「よろしい」

満足げに頷く姉に、椎羅はすぐに照れくさそうな顔付きになり、「うー」と呻く。アルシャルが軽く笑い、「それじゃ、行こうか」と立ち上がって歩き出した。

詩衣は、すかさず椎羅の隣へ行き、腕を組んだ。それを、妹は恥ずかしがって「やめろよ」と言うが、振りほどく事はしない。ふと、その姉妹を横から見てみた。

成程、顔の形や髪型などがそっくりで、双子と言っても通じるだろう。髪の色と眼つきを除けば、そっくりである。姉妹がよく似る

というのは、本当だったのだとどうでもいいことを考えた。

「お前はいつとも詩衣には敵わないんだな」

そう言って椎羅を見る。続いて「ざまあみろ」と半ば得意顔で笑った。

「てめっ！後で覚えてろ！？」

椎羅はそう言って、笑う。土手の青々と生い茂る、名も知らない草がさわさわと音を立てた。

第三話 仲間 3（後書き）

ようやく受験という怪物が過ぎ去り、小説を書く余裕が出来ました。ここまで読んでくださった方々、ありがとうございます。アクセス数を見る度に励まされております。

自分の小説を見て、こいつ痛いな、と自覚もしております。しかし、そこはこれから精進していきたいと思っているので見捨てないで下さったと思います。勝手ですが、今後ともよろしくお願いします。

第三話 仲間 4

「……で。お前ら家の方はいいのか？」

レイは昇る朝日をみやりつつ、隣を歩く仲間に聞く。アルシャルは「んー」と言っただけしばらく考えていたが、やがて、にこっと笑った。

「ま、家って言っても組織だし。仕事があったらくるでしょ」

「は？ アルに仕事があるぐらいなら、俺の方に来るだろ！？」 普通

「な！？」 椎羅の方が優秀、みたいじゃなか！ 取り消せよ！！」

「あ、アル君。前に頼まれていた腹巻き、出来たよー」

「腹巻き！？」

「うん。前何か血まみれだったから、また新しく作ったの」

「……アルシャル……お前何か勘違いしてないか？」

「そんな事ないよ、レイ。腹巻きは最高の防具なんだよ？ 何より暖かい！」

「……。ワケわかんねー」

ガシガシと荒く髪を掻き毟り、ふと、一言も喋らない同僚に気が付く。いつだってこいつの顔は仏頂面だが、今はそれより険しい。

眉間に皺が寄せられ、風がシアンの短い髪を弄ぶ。

「……？ シアン、どうした」

「……尾行されている」

「！？」

一気に四人の表情が強張る。が、直ぐにアルシャルと椎羅は元の表情に戻った。尾行されていることを悟られないように振舞う。シアンがそういうのなら、そうなのだから。

シアンのコード名は「ウルフ」。本人は嫌っているが、レイから見れば十分あっていると思う。こいつはいつだって鋭い。味覚や嗅覚が優れており、いざとなると獰猛になる。動物に例えるなら、文

字通り一匹狼といったところだろう。だから、組織の中でも頼りにされているのだ。それが、シアンのプレッシャーをかけることとも思わずに。

「シアン……いつからだ？」

「この土手に来た頃からだ。恐らく二人……」

シアンの目が急に細くなり、睨むような顔になる。これが四人への合図だった。戦闘開始である。十分な敵意を、シアンは感じ取った。いつの間にか、風は止んでいる。

「レイは詩衣を連れてここから離れる。落ち合う場所はバーでな」
そうシアンが呟いたかと思うと、もうその場にいなかった。姿勢を低くして駆け出していくシアンの後に、アルシャル、椎羅と続いて行く。

レイは、慌てて詩衣の手を掴むと、一気に駆け出した。詩衣も戸惑わずにちゃんとついて来てくれている様だ。この場面に出会うのは何度もあるらしい。背後で、鈍く重々しい音と、短い悲鳴がする。走る速度を上げ、声や音を遠ざけた。ゆっくりと、頭の中の地図を広げる。ここからバーまでの距離はそう遠くない筈だ。次の角を右に曲がり、街に入るのが一番早い。

詩衣の手を引いて角に行き当たる。思わず足を止め、角から現れた人物に目を向ける。目の前に銃器と人が飛び出してきた。小さく舌打ちして懷に手をつ込む。が、厳しい声が背後で響いた。

「伏せな！」

咄嗟に頭を低くすると、強烈な回し蹴りが飛んできた。回し蹴りは、そのまま孤を描いて銃器を弾き飛ばすと、詩衣が体を低くして相手に突っ込む。そのまま袖から数本の裁縫針を取り出し、素早く相手の右目に突き刺した。横目で相手を見て短い悲鳴を聞きつつ、さっと針を抜く。その動作は、手馴れたものだった。何気ない日常の中に、赤が染色される。長年傭としての役目を果たしてきたコンクリートの壁に、赤い花が咲いた。

「行くよっ！」

そう言っ て、詩衣がレイの手をとり走り出す。そんな様子に啞然としつつ、聞こえないぐらいの声で呟いた。額に冷や汗が浮かぶ。
「俺、一生こいつに勝てねえ……」

第三話 仲間 4（後書き）

どうも。更新が遅れてすみませんでした……。最初に言い訳をさせてもらいますと、「時間がなかった」のです。けれど、それは他の人にとっても同じことなんですよね。反省します！

それでは、ここまで読んでくださっている方々、ありがとうございます。これからは無理矢理にでも時間を作っていきたいとします。

第四話 変化 1 (前書き)

第四話 変化 1

「で。何でこんなことになってるのよ」

不機嫌そうに腕を組み、隣にいるレイを睨む。流石に首都であるこの中央街では、誰もがぶつからずスムーズに行き来している。そのことに半分感心しながら、もう半分は状況の整理に意識を集中させていた。

相も変わらず隣の少年は、肝心なところでは黙ってしまっている。初めて出会った時もそうだった。突然襲われるのは別に今に始まった事ではない。妹がこいつと同じ道に進んでからというものの、日常茶飯事である。それもこいつは知っている筈だ。それなのに、何故か話したがない。溜め息をつく。

「……もう。このままあそこに行ってもいいの？」

「いや、ある程度撒いてから行くぞ」

「あんたっていつつもそうよね」

「なにが」

「肝心なところは言わないことよ」

「……あのな」

「なによ」

「お前だって勝手に不法侵入してるだろうが。やめろって何回いったと思うんだ」

「ならしっかり戸締りしなさいよ。開けっ放しのあんたがいけないんでしょ」

「したって、お前合鍵で開けんだろうが」

「そうよ」

「それをやめろつつてんだろ」

「別にいいじゃない。あんたの家掃除してやってんのよ」

「しなくていい！」

「人の住める環境じゃないのよ、あんたの非道さは！」

すれちがう人達が、それぞれにこの私たちに注目する。こいつも、それに気が付いたのか決まり悪そうにそっぽを向く。レイが一回咳払いし、声を静めた。

「……まあ、とりあえず行くか」

しばらくの間沈黙が続き、ようやく人も少なくなってきた辺りで二人が別れた。レイがそのまま歩き続け、私はジグザグに動きながらバーに向かう。単独になると危険性が高まるが、こうすることで撒ける確率が高い。それに、お互い身を守るぐらいの強さは備わっている。

「……まだ、信用されてないのかなあ」

初めて出会った時も、レイは殆ど喋らずに隣にいた。今よりも少し険しく、常に回りに警戒線を張って見回していた。その頃よりは大分柔らくなってきたが、それでもまだ完全ということではないらしい。

「疲れるだけだろうに……」

そう呟いた。しかし、そんな風になったのも無理もない話かもしれない。あいつはずっと警戒する環境にあり、生まれ育ったのだから。きつと、隙を見せれば死に繋がると教え込まれてきたのだろう。その場所しかないと信じ、これからもそうやって生きていく。人を信じるということが出来ないまま。

なんて狭い世界だろう。どうして、あいつがそんなところにいなければならぬのだろう。何かそうしなければならぬ理由があるのだろうか。

あいつと私の歩んできた道は違いはすれども、根本的なところはそう変わらないはずだ。なのに、どうして気持ちは伝わらないのだろうか。性別の違いなのだろうか、それとも意識の違いなのだろうか。時折、凄く切ない気持ちになる。それもあいつには伝わらない。少しは気付けよ、とか思うが男はみんな鈍感だ。

前だって髪を切ったり染めたりしたのに、「気付かなかった」の一言だけだ。腹が立ったから数発殴っておいたが、未だに収まらな

い。黒から空色に変えたら流石に気付くだろうと思っていたのだが、
とんだ思い違いだったようだ。

「私ってそんなに影が薄いのかなあ」

そんなことをつらつらと考えてふと気が付くと、見知らぬ場所に
来てしまっていた。首都といえど、まだ広すぎて地図に書き込まれ
ていないところがある。だから人々は首都の中央に空港や高速道路
を作り、できるだけ広範囲に暮している。それでも、時々行方不明
者が続出する事も多い。自分は正に、その知られていない地域に入
ってしまったのだ。

「やば……。どうやって出るんだっけ」

足を止めて、周囲を窺う。山にはいったのか、多くの杉の木が見
下している。このままでは自分には不利になってしまう。服の袖に
数本の針を忍ばせ、神経を集中させる。

「……後ろに二、三人。どうしよう？」

助けが入ることはまずないだろう。周囲に警戒しながら、地図を
取り出す。

「ここからだ中央街まで二十分、てところか。んー、二人は平気
だけど三人はなあ」

そう言っ、何事も行動しなきゃねと一人で納得して駆け出した。

第四話 変化 2 (前書き)

前回、謎の前書きとなってしまうましたが、今回はちゃんと書こうと思います。

今回は、また新たな登場人物が加わります。いろいろ変なところがあります。ありがとうございます。いろいろ変なところがあるので、本編をどうぞ。

第四話 変化 2

おかしい。人通りの多い道を歩きつつそう感じた。いくらあつちが大規模な組織でも、もっと隠密で来るはずだ。静かに、かつ確実に殺しに来るはず。それなのにこういった尾行や、あからさまな行動を取るとは、愚の骨頂としか思えない。敵はまだこちらの力量を量っているだけなのだろうか。だとすれば、随分と慎重な奴らだ。

そもそもオリオンとは一体どんな組織なのか。主な行動は何か。何の為に殺しに来たのか。あまりにも情報が少なすぎる。マスターがあんなに驚くほどの組織なら、自分の耳にも入ってくるはずなのだが、今日までそんな組織があるなどとは知らなかった。

「……どちらにせよ、この状況はあんまりよくねーよな……」

『ヒハハハハ！ 気取り屋が！』

「お前は黙っている」

『余計な事考えてっと死ぬぜえ、おい。ヒヤハハハ。囲まれてるし』
ふと気が付くと、見た覚えのないところにいた。いつの間にか人通りも少なくなっている。確かここを真っ直ぐ行けば繁華街に出ると思っていたのだが、ますますおかしい。

とにかくここから出なければ。地図を取り出し、目でルートを追う。やはり道は覚えていなければいけないな、と一人呟いた。その瞬間、後ろから何かが当たったような気がして、慌てて振り向く。

「お兄さん、迷子なの？」

自分より小さな女の子が、そこにいた。今時珍しい白髪で、おさげの女の子。が、瞳が濁っている。まるで自分の目と同じだ。透き通るような水晶玉を大事そうに持っている。

「……何か用か」

「迷子なんだ」

「話を聞け。何か用かって」

「道案内してあげる」

女の子は濁った瞳で見上げた。そういえば、この子は話すときに口を開けていただろうか。声が聞こえない、それなのに言葉は分かる。それとも、自分が見ていないだけか。水晶玉に、自分の顔が映る。

「お兄さん、オリオンって知ってる？」

「……お前」

「知ってるんだよね？ 殺し屋さん」

戦慄を覚える。こいつ、何故俺のことを……。

「大丈夫よ、お兄さん。私は声をだしてないから、周りに気付かれる心配はないの。意思疎通っていうんだよねー？ それに、私にはお兄さんの考えが見えるんだから。ちょっとしたことなら分かるんだよ」

「……まるで悟り、だな」

冗談じみてそう言い放つと、女の子は表情を変えずに笑った。

「あははは。うまいね、お兄さん。否定はしないよ。私には……分かりやすく言ったら超能力があるから。嘘くさいって思うかもだけど、ね」

「……」

険しい表情でその子を睨む。何もかもお見通し、とはこのことだろうか。先程叩き込んだ地図を思い描く。

「甘いね、お兄さん。今ここで私を殺せばいいのに」

「……ガキ、だからな。一応」

「意外。お兄さん、結構有名なんだよ？ 変わり者って。常識外れなのかと思ってた」

「用件は」

「まあ急かさない、急かさない。もうちょっとお話しようよ」

「今すぐここでお前の顔面を撃ち抜くぞ」

女の子は不気味な笑みを浮かべて、わざとらしく肩をすくめる。まるで生き永らえてきた老婆のようだ。やること全てが手馴れているように見える。

「おー、こわ。お兄さん、掴みどころがないねえ。お兄さんが分かるんないや」

「お前如きが分かるはずがない。俺でさえ分かんねーんだ」

「弟さん、なら分かるかなあ？」

その単語を聞いた瞬間、考えるよりも早く銃をもつ手が女の子の眉間を捉えた。微かに残った道徳心で引き金を引く事はなかったが、今にも指を引きそうだ。ありったけの憎しみを瞳に込め、銃口の先を見る。誰にも弟の存在を引っ掻き回されたくない。何も知らないくせに。

「……お兄さん、やっぱり甘いね」

女の子は水晶玉を掲げ、太陽の光に当てる。すると、身体の力が抜け、銃を握った右腕がだらりと下がった。手からは銃が滑り落ち、次第に足の方も感覚が無くなっていく。正に立っているのがやつとであった。足が小刻みに震え、最早気力だけで立っている。

「……!？」

「私はメノウ。触れた石を自在に操れるの。もちろん、その石に触れた人もね」

「……へえ、そうかい」

先程何か当たったような気がしたのは、あれは小石だったのか。メノウがいたずらっぽく笑う。

「最初からこれ使った方が早いんだけど、話してみたかったしね」

「残念だったな」

「話すことは何もないって？ まあ、別に強制的に殺しても構わないんだけど、上の方の命令があるから、それもしないんだな、これが」

「大変なんだな、お前も」

「そうなんだよねー。一度に二人操らなきゃいけないし」

胸の奥がざわめき、嫌な予感がする。俺と、もう一人……まさか……。

「あのお姉さん、ちょっと厳しかったな。お兄さんと違って」

メノウは大人びたように笑い、長ズボンのポケットから三本の針をこちらに投げてよこした。自分はこの針の持ち主を知っている。針の金属音が、嫌な予感的中したのを告げた。

「お兄さんが仲間に入らなければ、お姉さんも死ぬから。その点、よく考えてね？」

「……考えたな。けど、俺がそれでお前らの仲間に入るとでも？」
「んー、五分五分ってところかな。お兄さん、優しいもん」

何故だかメノウの瞳が、少しだけ歪んだように見える。その瞳は懐かしいものを見るようだ。しかし、そう思った途端にメノウは背を向け、二度とその目を見ることは無くなった。

今まで姿を見せなかった男が二人こちらに近付いてきて、いきなり鳩尾に拳を入れてきた。息が一瞬止まり、膝をつく。慌てて咳き込んでいるとすかさず男が後頭部を殴り、脇腹を蹴ってきた。顔を上げる事すらままならず、鈍い痛みに耐える。意識が朦朧とするが、必死に立ち上がろうとした。

ここで諦めれば、取り返しのつかないことになるだろう。どうにもならない状況で、ふとそんなことを考えている自分を見つけて、心の中で溜め息をつく。

『ギャハハハ！　だせえよ、オメー。傑作！　面白すぎ！！』
耳障りな声がし、目を半分閉じる。

『ギャハハハ！　ヒハハハハハハ！！』
「笑い……すぎだろ……っ」

「お兄さん、誰と話してるの？」
笑い声の向こうから不安げな声はこちらに聞こえてきた。その言
い方が弟と被り、妙に気分が悪い。すると、また狂気じみた声が嘲
笑する。

『生粋のブラコンだな、おめー。今のお前、相当キモいぞ？』
「お前にも、分からねーだろな。いくらあいつが死んでからの付き
合いでもな」

『何をごちゃごちゃと。おめーのことなら全部知ってるぜえ？　世

界で一番のブラコンだっとなあ!」

笑い声が木霊すると同時に痛みが増し、荒い息をつく。視界が霞み、何もかもがぼやけて見えだした。

「俺は……」

『何しろ、お前は俺なんだからな』

髪を掴まれ、頬を思い切り殴られる。コンクリートに身体をぶつけ、そこで頭の中にある何かが音を立てて映像が切れた。

第四話 変化 3 (前書き)

大いに更新が遅れてすみません。まだこれと呼んでくださっている方々、恐縮です。それでは本編をどうぞ

第四話 変化 3

気が付くと、自分は薄暗い部屋にいた。恐らく倉庫か何かだろう。両手は後ろに縛られ、両足には鎖が繋がっている。少しだけ顔が腫れぼったいのが気になるが、どうしようもなくただ部屋の明かりである豆電球を見ていた。

「これが仲間になれて態度かよ……」

一人呟くが、余計に静寂が耳につくだけである。今日は仕事ではない為、黒いジャンパーには拳銃と財布、携帯しか入っていない。しかし、それらもきつと取り上げられているだろう。

「どうしょ……」

なるべくこれから先のことは考えずに、ここから抜け出す手段を考える。両手の方は何とか引きちぎれるとして、問題は両足に繋がっている鎖だ。こればかりは力技では外せない。

『俺ならできるぜ?』

「絶対嫌だ。お前、止まんねーし。いつも気分が悪くなるんだ」

『確実に逃げられるんだぜ。ケケケケケッ!』

「嫌だっつてんだろ。バカ野郎が」

『うわーこいつ自分のことバカって言うてるー!』

「ふざけんな。お前に言っただよタコ助」

『言っただろ? お前は俺だって。俺はお前でもあるんだよ、薄幸少年』

「……お前も意味分かってんのか?」

『あり?』

「……バカ」

自分で自分を呆れていると、部屋のドアが開く音がした。顔を上げて見ると、メノウと詩衣と自分より年上である少年だ。

「また独り言? お兄さん大丈夫?」

「どっかの誰かさんがそんな真似しなきゃな」

「あはは。作戦の一つだと思ってよ」

隣にいる詩衣が毅然とした表情でメノウを見て、自分を見る。その瞳には少しも憂いが見られず、寧ろ怒りが込められていた。その後ろで男が目を閉じてドアの近くの壁にもたれかかっている。どうやら本当に眠っているらしく、頭を何度ももたげていた。

「今日はお姉さんが無事ってことを知らせに来ただけだから。本当にお兄さんが仲間に入るっていうんならお姉さんは無事に帰してあげる」

視線をメノウに戻し、腹の中を探る。本気で言っているのだろうか。なんならここでこいつをねじ伏せる事は可能だが、もう一人の存在が気になる。あの男は一体何なのだろうか。仮にも捕虜ではあるが、これでは自分が十分に力を抑えられていないことは知っているだろうに。やはりその辺はまだ子供、ということか。

「今日一日だけ待ってあげる。早く決めてね。お兄さん達、いつでも殺せるし」

そう冷たく言ったかと思うと、急に背を向け部屋を出て行った。男を叩いて出て行くメノウに、疑念の目で見送る。男が慌てて顔を上げて出て行く。何故かこちらに会釈をして。その会釈と苦笑いをした理由が分からず呼び止めようとして、やめた。

二人が出て行った瞬間に詩衣が掴みかかってきた。空色の瞳には自分の顔が映っている。

「ちよっと！ 何であんたがここにいるのよ！！」

激しく胸倉を掴み、怒鳴るようにして聞いてくる。未だに両手を縛っている縄を引きちぎれていない為、成す術もなくそのままにしておいた。がくがくと身体が左右に揺れる。

「あんたバカじゃないの！？ 何で逃げなかったのよ！」

「あー、そだな」

「そだな、じゃないわよ。もう！」

「なんつーか相手が悟りだったもんで。というかお前は何で捕まっ
てんだよ」

う、と詰まった声を出しそっぽを向く詩衣に、さらに詰め寄る。

「お前、そのまま行っただんじゃなかったのか？」

「うるさいうるさい！ ……私のどこにもあの子が来たのよ。それで、油断して……」

「ふーん、お前だって一緒じゃん。……んで？ 何かされたか？」

「え？ ……そういや小石ぶつけられた、けど。それが何？」

「いや、別に……。なあ、悪いんだけどさ。そこら辺に刃物ねえ？」
すると、詩衣が一回だけ自分の頭を軽く叩いて部屋中を歩き出した。相手が何を考えているのかは分からないが、これで鎖が外れればこちらが有利になる。しかしこいつをここに連れてきたことを罠と考えた方が良さのだろうか。

豆電球を睨みつけ、ここから出る時のシュミレーションを幾つか想像しておく。理想と現実は大分違う。実際に理想と大きくかけ離れて死にかけた事がある。

「あ、これでいいかな。あったよー」

詩衣は部屋の隅にあるダンボールの山からチェーンソーを持ってきた。既に電源は入っており、ふと目が合う。にこりところらへ微笑んでいる。間違いない、斬るつもりだ。目が生き生きとしている。
「え、ちょ……待て、一旦それ電源切れ。頼むから。ちよっ、マジで頼むからお願い切って、切って下さいお願いします！ 待て待て待て待て！ こっち来んなあ！」

冷や汗が噴き出し、悲痛な叫び声となるが詩衣はお構いなしにこちらへゆつくりと歩み寄る。何も言わないのが逆に恐怖心をかきたて、必死に後ずさろうとする。だが背中が壁にぶつかり、それ以上逃げられなかった。

「落ち着け詩衣。落ち着いて！ それ切れて！ おいいい！！」

言いかけて、目の前にチェーンソーがあることに気が付く。もう、どこにも逃げ場がない。すっかり豆電球の灯りを背にした女は、今年に入って初めて見る最高の笑みを浮かべている。瞳が鈍い光を放っていた。

「嘘だろ……」

引きつった笑みを返し、裏返った声を引き絞った。絶望的な言葉が耳につく。

「アリーヴェ・デルチ《さよならだ》」

声にならない叫びが部屋中の大気を振るわせた。かん高い音が鎖の金属音と混じり合う。と同時に火花が散り、詩衣の顔が少しだけ赤くなっている。その恐怖はおよそ10分間と続いた。加えて詩衣が「おっと間違えた」などわざと切断部分をずらしたりしたため、自分にとっては長い10分である。何度も背筋が冷たくなるのを感じた。

ほとんど涙目でチェンソーの動きを見ていると、不意にピタリと音が止んで視界から消える。

「はい、これで切れてる筈だよ」

自分の心とは裏腹に明るい声が頭上から響く。続いて明るい笑い声が飛び交い、自分の頭をまた軽く叩かれた。

「ほんと可愛いわね、あんたって奴は」

「るせえな……あ……ありがとよ……」

「どういたしまして」

素早く両手を縛っている縄を引きちぎると、立ち上がる。一刻も早くここから出たい。そう切実に思った。お札を言うのは苦手だ。そもそも普段から礼を言われることなど、皆無に等しい。それでもこの女は言わなければ、怒り始める。全く女というのは面倒なものだ。真っ赤になった顔を詩衣に見られぬ様に背を向ける。

「……さて、どこから出るかな」

「え。普通に出て行けばいいじゃん」

「見張りがいるかもしれないねえだろ。見た感じ、監視カメラもなさそうだ。……何考えてんだか」

ぺっと溜まった唾を吐き出し、ドアに耳を当てる。ドアの向こう側は誰もいないようだ。罨か。それとも何かあったのか……? 何にせよ、抜け出すのは今しかない。ジャンパーから拳銃を取り出し、

安全装置を外す。

「おい、行くぞ」

「見張りは？」

「何故かはわからないが、一人もいない」

拳銃をドアノブに向け、三発撃つ。続いて真ん中に二発撃つと、勢いよく蹴破った。ドアがあっけなく倒れ、真っ白な壁が見える。どうやら廊下になっているようだ。銃を持ち直し、背中を壁に押し当てる。そこから様子を窺うが、向かって左側には何も無い。心の中で数字を3つ数え、素早く飛び出して右側を向く。やはり誰もいない。

「妙だな」

「うん……。大抵一人か二人はいると思うんだけど……」

「とりあえず左に行くぞ」

「分かった」

銃を前に向けたまま左に歩く。その後ろを、詩衣が見張るようについて行く。二人が無言で歩いていると、真っ白い壁が長く続き、急に行き止まった。二人の足音が止む。鍵のついた扉が突き当たりがある。

「あんま使いたくねえんだけどな……」

そう呟いて弾倉を装填して引き金に指をかけると、詩衣がそれよりも素早く針を取り出し、鍵穴に通した。そのまま黙って針を動かし続ける。やがてカチリと刻みのいい音を立ててドアノブが回った。詩衣がこちらに微笑む。

「ピッキングはお任せあれ」

「……それを俺ん家でやらねーでくれる？」

「無理」

有無を言わせぬ笑顔に溜め息をつく。目の前にいるこの人間の意図が分からない。何を思い、行動するのか。しかし、あのメノウにはそれが見えるらしい。そのことに少しだけ羨ましいと思う反面で、嫌悪を感じる。

気が付くと、詩衣は勝手に扉を開けて中に入っていた。どうやらここにも敵はいないらしい。ほっと胸を撫で下ろす。またあの時みたいになるのは嫌だとは思うが、自分には詩衣を守れるのかどうか、ということに自信が無かった。

「なんか……いかにもって部屋よね」

詩衣の声ではつとなる。部屋の中は簡素なものだった。だだっ広い空間の中、大きく横たわる机と組織内でもよく使われる大きな椅子があり、正に言葉通りだ。机の後ろは全面窓ガラスになっていて、そこから外の景色が見える。外は真っ暗で、所々に咲いている星がか細く光っていた。それさえも時折雲に覆われて見えないときもある。

「気をつけろよ。こういうところは何かしら仕掛けがある」

そう言って銃を握りなおし、辺りを見渡す。と、そこへ若い男の声が部屋に響いた。

「どうも。お騒がせしますね」

反射的に声のした方へ銃を向ける。いつの間にか目の前にある机の向こう側に、あの男が立ってこちらを見ていた。片方の目は前髪で隠れてしまっただけ見えこそはしないが、もう一つは見定めるような目つきで黙っている。

「あんたが親玉ってやつか？」

「いや」

「じゃあ、何で」

「一時的にここを任されています」

まるで人形のような瞳でこちらを見ているが、たまに自分の背後にいる詩衣にも目を配っていた。互いに睨みあっていると、にこりと微笑んでおもむろに相手が口を開く。

「ところで妹のメノウの話、吞んで頂けましたか？」

「妹？」

「ええ、白い髪の女の子です。先程僕と一緒にいた」

「悟りのことか。随分年の離れた兄妹だな、あんたら」

「いえ、あんななりでも、18なんですよ」

「……仲のよいことで。で？ 妹さんが見あたらねーけど？」

「今日は来訪者の多い事で、全員出はらっているんですよ」

「あなたは何か用があつてここにいらっしゃるでしょ？ 回りくどい言い方しないで」

背後で鋭い声があがる。しかし、相手もこの挑発には乗らずに穏やかな言い方で返してきた。

「ああ、そうですね。実のところ、僕はこういったことが苦手なのでいつも話がずれてしまふんですよ。すみませんね」

男が目を細めて言う、右の拳を左手の手のひらにあて、軽くお辞儀をする。昔聞いたどこかの国の体術での挨拶だ。確か砂漠の方だと仲間が言っていた気がする。

「名はシェン、姓は衛遠^{えおん}。オリオンに属する者です」

一歩近付いてきたシェンに無言で銃を向け、詩衣の前に出る。その場の空気が張り詰め、互いに神経を尖らせ始めた。が、それはほんの一瞬だけだった。

「用件といつては何ですが、我が妹のメノウを殺してくれませんか？」

「は？」

一瞬だけ自分の耳を疑った。瞳に疑念を浮かべてシェンを見ると、シェンは少し困ったような表情で微笑んでいる。まるで狐のようだなと思った。化かそうとしているのか、はたまた本気で言っているのか。

「あの子はああ見えても心根が優しすぎる。能力だって望んで手に入れたものではない。もともとこの道に入ることはなかったんだ。だけど、その力が見つかってオリオンに強制的に入れられた。……僕はもう、妹が傷つくところを見たくない」

真剣な口調だった。どうやら本気で言っているらしい。少しだけ警戒を解く。

「……それは、兄としてか」

「そう、ですね」

銃を持つ右腕を下ろし、項垂れた。殺すことは何時でもできるが、果たしてこれでこの兄妹は救われるのだろうか。誰でも死にたくはないはずだ。よほどのことがない限り、人は死を選ぶ筈がない。だが、同じ兄であるシェンの心情は分からないわけでも無かった。それでも、その死は妹に一体何を与えるのだろうか。安らぎだろうか、未練だろうか。どちらにせよ、この兄妹は救われないだろう。

「……断る」

ゆっくりと顔を上げ、シェンの瞳を捕らえる。人は苦しんでこそ生きている。苦しみから逃れることは、死への逃げだ。人は何かしらの苦しみを背負わなければならない。どれだけ辛くとも、逃げればそれだけそいつの価値が下がってしまう。

一度だけ乾いた唇を舐めて、慎重に言葉を選ぶ。

「あいつだって傷つくことを承知している筈だ。自分を受け入れる事で、死へ逃げたいのを堪えている。兄のあんたがそんなんでどうする？」

「……おかしいですね。貴方にもこの気持ちがかかってもらえらると思っただけです」

「俺とお前は違う。俺はそんなことを望んだ事がない」

今でも心の底から思う。確かに自分たち兄弟は道理から外れてはいるが、逃げたりなどはしなかった。それは弟だって同じはずだ。どうせ自分達はここでしか生きられない。そうなるように父親が仕向けたからだ。

それでも構わない、生きていたいと思った。だから自分の居場所を作る為にも、生きる為にも手を染めてゆく。躊躇ってはいけない。それが自分の今の生きる理由だ。

「俺はお前らの仲間になるつもりはない。悪いな」

「はあ……。交渉決裂ですか」

狙いを瞬時に定めて発砲する。それを相手も見越していたのか、左へ飛んで避けた。と同時に小さな球体がこちらに向かって来る。

それを詩衣が間髪いれずに数本の針で空中爆発させた。爆弾から煙幕が出る。

「今日は分が悪いのでここで切り上げさせてもらいますが、今度会うときにはまたゆっくりと話しましょう。会わせたい方もいらっしやいますし」

シェンの足音が扉に駆け寄っていくのが聞こえる。小さく鼻を鳴らし、扉の方に銃を向けて撃つ。だが、煙に巻かれていて当たったかどうかは分からなかった。軽く舌打ちをして声を張り上げる。

「詩衣、無事か？」

「もー！ 危ないじゃない。無茶しないでよ！！」

どうやら銃弾は当たらなかったらしい。一先ずは安堵して、拳銃を下ろす。声の方向からして割りと近くにいらしい。煙がようやく晴れだし、聞き慣れた四つの足音が耳に飛び込んできた。晴れきれていない煙の中から、鋭く尖った槍の先端が飛び出して来る。素早く銃で槍の切っ先を受け止めた。

「ボルト、俺だ」

「……ハーフか」

槍が高い金属音を立てて煙の中に引っ込む。その次の瞬間には槍の持ち手であるアルシヤルが、唇の端を吊り上げて現れた。その後ろには険しい顔をした椎羅と、不機嫌そうな顔をしたシアンがいる。お互いが武器を手にして警戒していた。

「お前らよくここが分かったな？」

そう訊ねると、アルシヤルが先程とは打って変わったようにそれに返事をする。

「僕達を尾行してた奴に教わったんだ。それに、後で家の方から仕事が来てね」

「ふうん……」

「おい、ハーフ」

厳しい声音が自分より年下の少女から発せられる。声のした方へ顔を向けるといきなり椎羅が胸倉を掴んできた。多少濁った瞳が鋭

く光る。

「てめえ、何だよその面は。まさか姉貴に怪我させてねえだろな」

「お前、俺がそんなことできる人間に見えるか？」

「いくら姉貴がてめえに惚れ込んでてもな、傷つけたら容赦しねえぞ」

「いい加減姉離れしたらどうなんだよ？」

「うるせえ。それならてめえも似たようなもんだろが」

きつと椎羅を睨みつけたり、拳を握ったりして怒りを抑える。しかし、次の椎羅の一言で怒りを抑えることが出来なかった。

「レキや親父がいるくせに」

気が付くと自分でも驚く程の力で椎羅の首を絞めていた。感情が普段より高ぶり、自分ではコントロールしきれなくなっている。頭はどこかでそう冷静に判断はしているが、憎しみに近い怒りはなかなかほどけない。胸の辺りがギュウっと締め付けられる。

大切な仲間なのに。唯一俺を理解してくれる奴らなのに。そう思っているはずなのに、今は憎いと思っている。こいつらがいてくれるのに、何故だか世界で一人だけになったような感覚がしていた。何故だろう。この気持ちは何というのだろう。

いつの間にかアルシャルとシアンに羽交い絞めにされ、椎羅は自分から離れた所にいた。二人が何かを言っているが、聞き取れない。ただ、視界はぼんやりと薄暗かった。その中でも、椎羅の怯えた表情だけがやけにはっきりと見える。ようやく視界は揺れてはいるが明るみ始めた。

「一体どうしたんだよ!？」

多分そんなことを言われたんだと思う。口の動きを狭い視界の中で見ただけだから何とも言えないが、きつとこういうことだろう。そういえばこいつらにこれだけの怒りを見せたことは無かったな。心に穴が開いたような虚無感に襲われる。もう自分が何をしたい

のか、何をされたいのかが分からなくなった来た。訳も分からず立ち尽くしていると、目の前が真っ暗になり、急に膝の力が抜け落ちる。そしてそのまま意識が暗闇の中へ引きずり込まれていった。最早周りの声など聞こえず、ただ深い暗闇だけがそこに横たわっている。

過去に捕われた者 1 (前書き)

冬休みにやつと突入です。今年も残り僅かなのですが、小説の方はまだまだ続いていくと思います。どうぞよろしくお願いします。

過去に捕われた者 1

ふと目を開けると、見慣れた景色の中にいた。またあの夢だ。あの日、弟と永久に別れてしまった頃のこと。

あの日も綺麗な半月が出ていて、少し冷える晩だった。いつもの様に仕事を請け、それが偶然弟にも同じ仕事が回っていた。仕事内容は至って単純なもので、「とある組織を壊滅又はボスの暗殺」というものだ。

当時は何度か仕事を成功させ、自信もあったことから完全に油断していた。仕事の内容に沿ってボスは暗殺できたものの、一つだけ小さなミスを犯した。その部屋にある小型の警報機に気付けなかったのだ。ボスを殺した途端に、組織内の警報機が一斉に鳴り出した。俺は舌打ちしてから、部屋に取り付けられている監視カメラに向けて銃を発砲する。助かる見込みは限りなく低いが、何もしないよりはましだろう。そして素早く辺りを見回した。窓は一つも無い、出口は後ろにある扉だけだ。ここに立てこもるのも得策ではない。

どうせ援助など来やしないのだ。自分の命を助けられるのは、自分しかない。これまでの経験からそう学んだ俺は、弟の手を握り締めた。せめて弟だけはそう学んで欲しくはない。孤独を感じて欲しくなんかなかった。

「お兄ちゃん……」

不安げな声が横から聞こえる。きっと俺の不安が感じられたのだろう。いつもは仕事で俺一人だが、今回は違う。たったひとりの身内が側にいる。何としても護りたかった。だから返事の代わりに弟の手を握り返す。

「大丈夫だ。死なせやしないから」

そう言って、弟に微笑んだ。こういう場合は少しでも不安を和らげたほうがいい。不安感が増すと、それは混乱を招き最悪の事態を引き起こす。護ると決めた以上、それは避けるべき事であった。

弟はまだ不安そうに、それでも少し安心したように「うん」と言う。その様子を見てから前へと向き直った。耳に神経を集中させ、周りの音を聞き取る。かたい革靴の駆ける音が幾つかこちらに向かつて来ていた。急いでここから出なければ、後々面倒なことになる。ちらと弟を見て、一言呟いた。

「……レキ、おぶされ。走るぞ」

「え？」

「いいから早く!!」

動揺している弟を無理矢理背中に戻すと、勢いよく地を蹴る。そのまま一気に駆け出した。あつという間に景色が通り過ぎてゆく。その様子に自分自身も驚いていた。こんなにも早く走れたのだろうか。駆けている途中何度か敵と相対し、その度に柱の影に隠れてたりしてやり過ごす。敵の装備は主に支給品である銃であったが、中にはマシンガンといったものもあった。どうやらこの組織が麻薬や密輸で儲かっているという噂は本当らしい。

硝煙の中銃弾を飛んでかわしながら、敵の顔面を踏みつけて通り過ぎる。この調子が長く続いた。

逃げ切れる。そう思った瞬間だった。

「お兄ちゃん!!」

背中にいる弟が悲鳴に近い声を発した。慌てて駆ける足を止めると、足元に銃弾が飛び込んできた。続いて背後から重い扉が閉まる音がする。罨だ。

改めて前へ向き直ると、到底一人では敵わない程の人数が銃を構えてそこに立っていた。黙ってレキを下ろし、背後へと押しやる。発砲してこない様子を見ると、「撃つな」といったような命令がでているらしい。同時に妙な動きをすれば敵は撃ってくるだろう。ならせめてその命令を下した張本人と話が出来れば、弟は助かるかもしれない。そう考えた直後に、そいつが堂々と目の前に現れた。

黒髪で、そり込みが入っているような黒いサングラスをかけている男だった。真っ白なコートを着て腕を組んで仁王立ちをしている

その姿は、どこか貫禄が出ている。

「こんばんは。小さな殺し屋さん」

見た目に反して声は割と高めだ。恐らく声だけを聞くと、青年と間違えるかもしれない。様子を見ようと、とぼけてみる。

「俺のことを知っているなら、そこをどいてくれねえかな？」

「笑えない冗談だ。まあ、今回は礼を言いに来ただけだな」

「礼？」

「我が主、フィナードⅡシュバルツを殺しただろ。それで権限が俺に回ってきた。お陰でここを乗っ取る事が出来た訳だし。礼を言うておこうか」

「その権限で俺たちを見逃して欲しいもんだ」

「もちろん俺もそうしたいと思ってはいる。だが前任も俺みたいに全く嫌われていた訳じゃあねえ。お前に借りを返したいってさ」

俺は口の端を吊り上げ、少しおどけてみた。

「借りなんざいらねえよ。あげる」

「……上に立つ者としては、こいつらの言う事を全く無視するとう訳にはいかねえんだよ。分かるだろ？」

「分かりたくもないね」

「俺の組織は正にそんな あるじ 主なのだから」と喉元まで出掛かったが、何とかその言葉を飲み込む。親父は組織の仲間を何とも思っていないが、仲間たちはそれでも構わないと親父に付いて行く。組織のボスである親父に、仲間は魅了されている。そして俺は親父の息子として勝手に期待を背負わされていた。俺にはそれがうっとうしくて仕方が無い。

生まれたときから既に期待され、教育の為、とほぼ洗脳に近い状態で読まれた絵本で、初めて母親の存在を知った。母親なんて、見たことが無かった。いつの日か親父に聞いてみると「死んではない」らしい。だが、本当かどうかは分からない。

ここで生きるには心を殺すこと。それが一番の方法だと親父に学んだ。また、誰も信用してはならない、無関心でいることだと。あ

そこでは親父の言葉は絶対だ。その言う通りにして親父の言うことを信用しないとすれば、母親が死んでいる可能性だってありえないことは無い。

しかし、「死んではいけない」と言われた弟はこうして存在していた。なら母親も存在している可能性だってある。俺は小さい頃から母親の存在なんてどうだってよかったが、弟には時々寂しいときがあるらしい。それを埋められるのは俺では無理なようだ。だからなおさら弟には生きて母親に会ってほしかった。

再び交渉を試みる。

「その論理だと、借りは俺だけみたいだな」

「いや、後ろにいる奴もあるみたいだが」

「こいつは関係が無い。俺だけであんたらのボスを殺せたんだからな。こいつはただ見ていただけだ」

「……じゃあ、こうしよう。俺たちの仲間に入るなら殺しはしない。どうだ？」

「俺自身の答えはNOだ。こいつがどうかは知らない」

すぐさまそう言い返し、ちらと横目でレキを見た。レキは不意をつかれたような顔になり、しばらく考え込む仕草をする。

もしここでレキが敵の仲間になるというのなら、俺はどうするだろうか。どうすればよいのだろうか。ぼんやりとした疑問が頭に浮かぶ。そして唐突に死という文字が浮かび上がった。

しかし、その単語はレキの返事によってまた水面に消えてゆく。

「僕は貴方達のおもちゃにはなりたくない。ハーフムーンと同じがいい」

自然と目が大きく見開かれるのが分かった。確実な生を捨て、死を選んだのだ。俺は苦笑いを浮かべて一言だけ。

「馬鹿野郎」

レキはやはり少し困った顔をして笑う。その様子を男は怪訝そうな顔をして見ていた。「わざわざ死を選ぶなんて」と思っているのだろう。それもそうだろう。しかし、俺とレキは妙なところで似て

いた。それは負けず嫌いなところだ。それだから思考回路も少し似通っていて、ケンカも度々したことがあった。

だがここでケンカをする暇は無い。生き残れる可能性は大幅に減少したが、まだ微かに残っている。それに賭けてみるしかない。

「なら別にいい。馬鹿だな、お前。……後はお前たちの好きなようにしていいぜ」

男はそう言って軽々しく手を振ると、俺たちを囲んでいる敵の群れの中に紛れ込んだ。レキと背中合わせに立ち、銃を手渡す。

「いいか、万が一のことがあったらこれで撃て。安全装置は外してある。引き金を引くだけで終わるから」

「え？ ……何を」

「怖かったら耳を塞げ。少し離れろ。終わって俺が帰ってこなかったらそれで撃つんだ」

早々とそれだけを伝えたと、俺はレキから少し離れて前へ出る。

そして、目を閉じて、全神経を集中させた。初めて人を殺したときの感覚を呼び戻す為に、あれから二度と使わないと決めた感覚を今一度使う。今度は人を殺すのではなく、生き残る為に。

感覚の一つである聴覚が、野太い声が「撃て」というのを拾った。瞬間、無数の銃声がある場所を満たし、その距離を頭が数字に換算していく。再び目を開けると、銃弾がゆっくりとこちらに向かっていくのが分かった。

『お久し振り』

前より少し成長した男の子の声が、しっかりとした発音でそう笑う。

「交代だ」

『ふうん。珍しいな』

「いいからしっかりな」

『ヒハッ。しないとも思ってたのか？ 確実に生きていたいんだろ？』

「来るぞ」

声に出ない会話に、意識が獣のような太い腕と強い欲望によって途切れた。

過去に捕われた者 2

獣毛がびっしりと生えた両腕を顔の前に持つてくると、飛び込んでくる弾丸を受け止める。硬い手の平の中で弾丸は勢いをなくし、数発の銃弾は頬や耳を掠めた。

それから間髪いれずに敵の方へと突っ走って行く。数発の弾丸がこちらへと向かう中、目を細めて出所を見据えた。十二時の方向と五時と七時、そして九時の計四つ。

まず手前にいる五時の方向へと向かう。途端に先程よりも増えた銃弾が飛び交い始める。前転してそれらを避けつつ、最初の発信源にたどり着いた。

右の手の平をバキリと鳴らしてから、怯えた表情の相手の顔面をわし掴み、握り潰す。鋭く伸びた太い腕が、相手の顔に食い込んでいく。その瞬間、いやに生暖かい液が腕を伝い、断末魔を間近で聞いた。あっという間に右手が赤く染まっていく。

そのまま掴んだ手を離さずに、その場で死体を振り回す。数秒間敵が怯んだその隙に、すかさず体勢を低くして懷に突っ込んだ。死体の頭と目の前の敵の額をぶつけ合わせ、よろめく相手を右手でなぎ払う。血が飛び散り、頬も赤く染まった。

『ヒヤハハッ。面白えなあ、やっぱお前らって』

にんまりと満足げに笑う少年は、楽しそうに右腕を勢いよく振るう。するとこびりついていた血が床に落ちた。落ちた血はゆっくりと床を赤く染めていく。機嫌良く鼻歌を歌っていると、敵の一人が刃渡りの長いドスで背中から切りかかってきた。

強固な左腕を差し出してそれを防ぎ、同時に右腕で男を叩く。叩かれた男は殴られた左脇を片手で押さえ、慌てて体勢を立て直す。そうして男が立ち上がりざまに、下段から切り上げた。が、ドスは僅かに軌道がそれて、頬に浅く切り傷が出来るくらいだった。そいつの切り上げた右腕を掴んで持ち上げると、拳を作っている左手を

顔面に叩き込んだ。拳がめり込んでいくのが分かる。鋭い爪をもんどりうつ男の腹に突き刺した。そして素早く爪を引き抜き、歯を見せて笑う。

『欲望に振り回され、意思すら持たない木偶人形だ』

素早く屈んで足払いをかけ、勢いよく天井へと舞い上がる。そして全体重を両足にかけて落下した。床のコンクリートが砕け、真下にいる敵は内臓を押し潰されて吐血と短い悲鳴を残す。と同時に、落下した衝撃で床が崩れだした。敵が慌ててその場所から離れて銃を構える。ここは七階で、下層は吹き抜けになっている。落ちたらひとたまりも無い。

『ヒヤハハハッ！ 這いつくばって逃げるか！？』

落下する間に骸を蹴り、壁を走って来て再び戦場に戻った。床に着地した音が部屋に響く。誰もがその状況を信じられず、啞然としている。が、一瞬の間を置いて、再び銃弾の嵐が迫ってきた。左腕で顔を庇い、次に七時の方向へと向かう。すると、集まっていた目の前の敵が急に道を開けた。というより大きな手がその群れを裂いているようにも見える。眉を顰めると、大きな足が目に入った。

「化け物が」

目の前に巨体の男が立っていた。声は低く、まるで地の底から聞こえてくるようだ。そう思った瞬間、大男の鉄の拳が風を切って振り下ろされる。腕を義体化をしているらしい。無機なモーター音が小さく聞こえた。

素早く大男の下をくぐった。慌てて大男が振り返るのを、余裕を見せて待つ。すると、大男の顔は口の端を引きつらせたまま笑っていた。

「我が雅龍式鉄拳をよけようとは。ただのバカではないようだ」

『ハッ。たいそう立派な拳だこと。ま、あんまり血で汚したくないんでね』

「ならば一発でその概念を取り払おうか」

『お断りだ。そんな出来損ないの拳で、俺を捕まえられるのかい？』

鈍牛が』

右手を鳴らし、大男を睨みつける。義体化した部分は、元の腕よりは数倍の力と素早さがあがるだろう。替わりの金属で埋め合わせたその腕に、温もりは無い。

しかしこの男はそれをよしとした。それは今までに温もりを感じなかったからなのか、それともただ強さを求めたのか。或いは生まれつき元の腕がなかったのか。

そこまで考えて、止めた。どうせ考えても仕方の無いことだ。目の前のこいつは敵。それだけで十分だ。興味を引く事といえば、その巨体でどれだけ動けるかということと、義手を使ってどこまでの強さかということだけである。ただ、それだけだ。

右手を振り上げると、雅龍も踏み込んできた。しかしそのままの体制で動こうとしない。だんだんと雅龍が迫ってくる。ついに目の前まで迫られると、右腕を振り下ろした。床が砕けて煙が上がる。しかし雅龍はたじろぎもせずに、義手の腕を横になぎ払う。その当たる瞬間に飛び上がり、その腕の上に乗った。

「!?!」

驚く雅龍を尻目に煙の中から勢いよく顔面まで走る。右手の爪を顔に突き立て、重力と共に落ちた。雅龍の顔に五本の赤い線が引かれる。雅龍は悲鳴を上げながら片手で顔を押さえてはいるが、片目で睨みつけてきた。

その瞬間、鈍く重いものが腹部に命中する。あの大男が片足でバランズをとり、片足で蹴りつけたのだ。勢いよく蹴られ、敵の輪の中に入る。敵の何人かが倒れたが、当てられた敵はあっという間にとりまき、ここぞとばかりに照準を合わせようとした。

咄嗟に舌打ちをする。足払いを素早くかけると、右腕でそのうちの一人の足を引っ掴む。そして思い切り持ち上げて、床に叩きつけた。それでも銃の発砲音が響く。再度舌打ちをして左腕で全部の銃弾を弾き落とす。

ふと影が降りかかった。振り返ると雅龍が義体の腕を振り上げて

立っていた。顔面の真ん中に五本の赤い線がある。一本の線が片目を潰して、赤い線を引いていた。そして無事な片目は、怒りの炎を携えて見下していた。してやったりなど思っているのだろう。薄く笑って、冷たく光る義手を振り下ろしてくる。

気に食わない。玩具おもちゃのくせに。

目の前の大男に憎しみを込めた目を向けた。

『小賢しいんだよ、てめえら!!』

雅龍が振り下ろすより早く右腕を振り下ろす。立っていたところに大きな穴が開き、鋼鉄の右腕が完全に振り降ろされる前に雅龍へと突っ込んだ。雅龍が慌てて片手で怒りに満ちた化け物を捕まえようとするが、捕まりそうな直前に飛び上がる。一つ一つの動作に力を込めて、動きは遅い雅龍は完全に隙を生み出した。思い切り振りかぶった片手は空を掴む。目を細めて冷ややかに、焦る雅龍を見下ろす。

最早楽しませてやる必要性はない。こいつはただの玩具に過ぎないのだ。殺す快樂を与えてくれる、玩具。それが刃向かった。自分を見下したのだ。気に食わない奴。ならばもうそんな玩具は要らない。邪魔だ。

『見下すんじゃねえ!!』

雅龍の両肩に、両足をそのまま倒す勢いでつける。そして両腕を倒れかけた雅龍の左胸に当てた。

「ぬ!？」

『お前、もう要らねえよ』

両腕を左胸に食い込ませ、爪をたてた。鋭くなった爪は雅龍の胸を引き裂き、中へ吸い込まれていく。そして一気に心臓と思われる肉塊を掴み、引きちぎった。これまでにない程の大声を雅龍が発す

るのを間近で聞いたが、断末魔はすぐに止む。暫く部屋には先程の断末魔だけが残った。あとはゆっくりとその巨体が倒れる音が来るのを待っただけだ。その際に噴出する血を顔といわず全身に浴びて、真っ赤になってしまった。

少しだけ気分が晴れる。子供のように満面の笑みを浮かべた。が一瞬のことだった。すぐにまた笑顔を引っ込め、不機嫌そうな顔で倒れゆく雅龍の肩を蹴りつける。その勢いも足して、巨人が倒れたのと床に足をつける音が重なり合った。巨人の足元に血溜まりが出来て、血がこちらへと流れてくる。そうして出来た血溜まりにどす黒くなった自分が映った。それを見て、血を払い落とすことさえも煩わしく、鼻を鳴らす。まだ腹の虫は治まらないが、前よりは少しくよくなった気がした。

『つまんねえの』

口の中に溜まった唾を死体に吐き捨て、もう一度巨人を見る。そこで力尽きたように自然と瞳が閉じた。

誰かにこのゲームの続きを引き継がせるように、それでも冷酷な事実を残すようにして。

過去に捕われた者 3

ぼんやりとした視界の中、敵の大半が武器を捨てて逃げ去っていた。はつきりしない頭で、その理由を考えた。

終わった。何もかもが終わったんだ。そう思うと溜め息を吐き、項垂れる。例えばようなない疲労感に全身を襲われた。

しかし、ふと目を向けた先に血溜まりが出来ていることに気が付いた。その水面に映った自分を見ると、全身が真っ赤な姿が映っている。素早く自分の身体に目を走らせるが、どこにも大きな傷跡は無い。返り血だ。それも傷つけて、ではなく、確実に重症を到らせただほどの。小さく声をこぼし、震える右手を持ち上げた。見間違ふ事のない、見慣れた深紅の色に染まっている。荒れる呼吸の中、自身に問いかけた。

すると、心の底では既に答えが出ているが、認めたくはない答えが返ってきた。そんな答えしか返ってこなかった。

暫くして血溜まりの出所が気になり、恐る恐る目で追ってみる。心臓の音が高鳴り、吐き気もしてきた。嫌な予感がする。こういう時は、決まって予感というものは的中するものだ。想像はしていたが、やはり間の伸びた声が出る。

「……あ……」

数体の死体と見知らぬ大きな男が、左胸に大きな穴を開けて倒れていた。大男の目は見開いたまま、瞳孔が開いている。未だにそこから血が流れ続けていた。

何故こいつだけ左胸に大きな穴が開いているのだろうか。大男に近寄ろうとして、震える右足を前へ出した。膝をつきそうになるのを堪える。

その時、右足にゴンと鈍い音を立てて何かが当たった。恐る恐る下を見ると、真っ赤な肉塊のようなものが転がっている。幾多の血管が浮き彫りになっている物体だ。医学の本などで見慣れた形。動

物の体で最も重要な器官、心臓である。それが血と同化してどす黒く染まっていた。当然それは主を失って、動いていない。

背筋が凍ったように冷たくなり、声にならない悲鳴を上げた。思わずどす黒く染まった右手で目元を抑える。頭の中が瞬時に真っ白に書きかえられていく。一体何が何だか分からない。

混乱する頭で何が起ったのかを思い出そうとするが、何も思い出せない。それ以前にここがどこなのかも忘れているみたいだ。思い出せそうで、思い出せない。下手をすれば自分が誰なのかも分からなくなってしまうようだ。胸の奥がざわめき、落ち着かない。

すると不意に背後に誰かが立つ気配を感じた。反射的に勢いよく振り返る。まだ誰が残っていたのか、と。

「……兄、ちゃん？」

怯えた表情の男の子が、震えながら立っていた。咄嗟に「弟」という単語が口について出る。そうして、ようやくその時になって思い出した。そうだ。この弟を守るため、人を殺したのだ。

弟の様子を見てショックを受けるのと共に安堵する。弟だけには見られなくなかったが、どうやら護ることは出来たようだ。しかし、その大事な存在を、少しの間とはいえ忘れていた自分が恐ろしかった。

「……ごめん。怖かっただろ」

どういう顔をして良いのか分からず、疲れきった苦笑いを浮かべる。本人ですら目の前のこの状況がこんなにも恐ろしいのに、それよりもまだ小さな弟に、トラウマと呼べるほどの恐怖を味わわせてしまった。申し訳ない気持ちで一杯になる。それでも、とりあえず事情は説明しておこうと口を開く。大きく息を吸い、話す覚悟をする。

「たまに、こういうことがあるんだ。……気が付いたら、人が。たくさん……死んで……」

そう言う自分の声も震えていた。口を閉じて、ゆっくりと這い上がってくる恐怖に耐える。だが、堪えきれずに一筋の涙が零れ落ち

た。真っ黒な頬に、白が混じる。その後も流れ続けて、一向に止まる気配が無い。

もしかしたら心のどこかで、この行為を許して欲しいと思っていたのかもしれない。謝らなければ、と思った。たとえば、一生許してもらえないとしても、とにかく謝らなければ気が済まない。弟に詫びる気持ちで一杯だった。

その考え方は甘い、と言われても否定は出来ない。実際、俺は自分に甘く、これしか方法が思いつかないのだから仕方がない。だから、俺は謝るんだ。

しかしそんな思いとは裏腹に、声が喉につかえて出てこなかった。何度も口を開ける。それでも肝心の声は出ない。深呼吸をしようとして、逆にそれが感情の起伏を抑えられなくなってしまった。涙が勢いを増して流れ続け、項垂れる。

「ご……めん……ごめん……な……」

「兄ちゃん」

レキが、血溜まりを踏みしめて近付いてきた。ゆっくりと、しかし確実に。まるで俺の覚悟を承知しているかのよう^{のう}に歩いてくる。

どんな非難や罵声^{ばせい}を浴びせられようとも、今のこの現状は事実で、変わりようがない。仕方の無いことである。実際に非難されるようなことをしたのだ。それはきつと怖かっただろう、嫌いになったことだろうと思う。弟がそう感じるのも仕方の無いことだ。全部、事実なのだから。

拳を握り、歯をきつく噛みしめる。この弟は一体何と言うのだろうか。仲間にも恐れられているこの力のことを、弟は何と罵る^{ののし}のだろうか。あれやこれやと想像し、恐ろしくなった。目の前に弟が立つ。

「謝らないで。元は僕の失敗なんだから」

思ってもいない言葉に驚いて顔を上げる。弟は数時間前と同じ、少し困った顔をして笑っていた。

「こんなことになっちゃったのも、僕のせいなんだよね。ごめんな

さい」

「なっ……何で」

「僕があの時、警報機を壊しておかなかったから……」

「馬鹿。あれは俺のミスだ！」

「ううん。なら、僕のせいだ」

笑顔を引っ込めて、レキは少し下を向く。レキがしきりに謝る理由が分からなかった。そして言葉の意味も理解できずに、ただ弟を眺める。

「どういう意味だ？」

「……初めて会った時にも言ったように、僕と兄ちゃんは一心同体なんだよ」

その言葉にはっとなる。確かに、初めて親父からレキを紹介された時に、親父がそんなことを言っていたのを思い出す。だがまさかそれをレキが真に受けていたなんて、思ってもみなかった。

思いも寄らない展開にいささか戸惑っていると、レキは再び話しかけてくる。

「兄ちゃんのミスは、僕のミスでもあるんだ。僕と兄ちゃんは繋がっている。一心同体っていうのかな、これって。だから、今日の事だって僕が望んだことでもあるんだよ」

暫くは声が出なかったが、間をおいて溜め息を吐く。そして少し眉を寄せて一言。

「馬鹿野郎」

レキは嬉しそうに微笑んでいた。けれど、その笑顔が最後だった。突然背後で銃のリボルバーを回す音が聞こえる。慌てて振り返ると、一人の男が数十メートル離れた地点から身体を中心に狙っていた。どうやらこの男は逃げると見せかけて殺す機会を窺^{うかが}っていたらしい。

「この化け物があ！」

聞き慣れた台詞^{せりふ}と、見慣れた憎しみをその目に見る。その時だけ、きつと俺も先程はそんな目をしていたのではないだろうか、と思っ

た。

だがすぐに現実に戻る。焦りながら「伏せろ！」と弟を庇う位置に立ち、銃を構える。照準が上手く男に定まらない。ようやく合った直後に敵の発砲音が耳に響いた。

せめて弟は、死なせてはならない。弟は俺と違って、夢を持っている。母親に会いたい。だけど俺にはそんな夢はないし、きっとこれから存在しないだろう。生き続ける理由は、ただ死にたくないからだ。弟に比べれば、そんな俺には何の価値もない。生きていくだけの存在なのだ。それなら、死ぬのは俺でいい。

今までそう思っていた筈なのに、次の瞬間には動けなかった。

レキがいきなり前へ飛び出し、銃を撃った。レキの方が遥かに命中速度が上だったらしく、敵が避ける前に敵の身体を撃ち抜く。それでも敵が撃った弾は止まらない。弾丸は外すことなくレキの身体の中に入ってしまった。目の前で鮮血が弟の身体から噴き出していた。仕事でよく見かける色が、弟を彩っていく。

全てが一瞬の事で、理解できなかった。

「ぎ……！」

目の前でレキがスローモーションのように倒れていく。何も、出来なかった。もう、何もかもが遅かった。嫌がる暇もなく、茶飯事のように聞いた音もこの時ばかりは嘘めいたものに聞こえる。これは、人が倒れた音だ。頭はただそれだけしか理解してくれない。それが誰のものなのかは判断しようとはしなかった。絞り出した声が掠れる。

「……レキ？」

「に……いちゃ」

レキが苦痛に顔を歪ませ、絶望的になっている俺を呼んだ。そこでようやくこれが現実だと分かった。レキが死にかけているのは疑いようの無い現実だ。慌てて駆け寄る。

「レキ!!」

「兄ちゃん……敵は……」

「死んだよ。大丈夫だ、安心しろ。お前は死なないから。死なせやしないからな！」

慌ててぐったりとなったレキを担ぎ、出口へ向かって走る。レキは、普段は大食いというのを感じさせないほど、とても軽かった。荒い息遣いが聞こえてくる。

早く手当てをしなければ。だけど、心の片隅で無気力な俺が囁いていた。「もう駄目だ」、「間に合わない」とそればかりを口にする。

その囁きを少しでも遠ざけようと、精一杯弟と話した。死なせない。俺自身とレキに希望を持たせようと、必死で思いつく単語を口にする。

「レキ！ お前、母さんに会いたって言ってただろ！！」

「……母さん、あっちにいるのかな」

「俺らの親父のことだ。母さんは絶対生きてる！ だから」

「そうだと……いいな……」

「寝るんじゃないぞ、コラ！ もうすぐ家に着くぞ！！」

「……見えないよ、もう。真っ暗で……目、開いてるのかも……分かんない」

だんだんと消え入りそうな声が背中からかうじて聞こえる。もうすぐで出口な筈だ。外には、誰か迎えの者が来ているかもしれない。そうしたら、手当ての道具ぐらいはあるだろう。弟は助かる。いや、何としても助けなければ。

「レキ！ 目を開けてろよ！ じゃないと殴るからな！」

「けど、兄ちゃんが死ななくて……本当に良かった」

「……っ俺達は一心同体なんだろ！？ これじゃ矛盾してんじゃないか！！」

半ば怒鳴るようにして、レキの意識をこちらに向ける。しかし、背中の中は今にも消えてしまいそうだった。

ゆっくりと、確実に死神が弟にまわりついてくる。「死」からは誰も逃げられない。そう死神が笑っているのが目に浮かぶ。

もし一生の願いが叶うのなら、いますぐここで死神を取り払ってやりたい。出来る事なら弟と代わってやりたかった。死ぬのは俺でいい。それが兄としてのけじめであり、我儘である。わがままというより、何故俺より「生きている」弟が死ななければならぬんだ。

「何で……お前が死のうとするんだよ」

独り言のつもりだったが、ちゃんとレキには聞こえていたらしい。小さく笑う声が背中越しに伝わってくる。しかし、その笑い声は息も絶え絶えといった様子だった。

「これは……僕の……意思な……んだ」

「……こんなの……おかしいだろ？ 俺は、お前の兄ちゃんなのに……！」

深く息を吐き、次の言葉が喉から出てくるのを待つ。

「兄ちゃんなのに………護ってやれなかった……っ！」

なかなか出てこなかった言葉が、震える形で出てきた。我ながら弱々しい声だったと思う。そして同時に外までの道のりが長く感じられた。

何故だ。

こんなにも急いでいるのに、時の流れが遅く感じられる。

早くしないと弟の命が燃え尽きてしまう。

何故だ。

こんなにも離れたくないと思っているのに。

こんなにも死なせたくない願っているのに。

何故だ。

「死」は平等に訪れる。

どんな時でも。誰にでも。

不意に温もりを失いつつある手が、涙で濡れた頬を撫でた。まだ、レキが生きている証拠だった。そして、笑いながら一言。

「兄さんのせいじゃないから」

これが、最後だった。撫でる手が力を失い、重力によって落ちる。先程の静かな息遣いも聞こえなくなっている。落ちた手から伝わる体温が、急速に下がっていくのも分かった。そっと弟の顔を見る。すると、穏やかな寝顔がそこにあった。小さく息を呑む。世界が時間を止めた。

死んだのだ。今まで自分が追いやった敵に与えたものに、弟は捕えられたのだ。敵にも味方にも訪れる「死」に。何よりも大切だった弟が、死んだ。これは夢では無く、現実起こったこと。そう思うと、走る速度が徐々に減速していき、遂には出口の前で立ち止まった。

頭の中が真っ白で、何をしていたのかわからない。俄かに信じがたい光景である。

弟は背中で眠っているのではない。楽園を信じていたあの頃に戻

ったのだ。なら、いつの日か帰ってくるかもしれない。

ぼんやりとした頭でそう考え、納得する。帰ってこないなんてことは、信じられなかった。いや、信じたくなかった。力なく項垂れる。

これで、ここには俺独りだ。唯一の光も失った。後に残されたのは、汚い世界だけだ。裏切り、騙しあい、傷つけあう、何も信じられない、安息のない世界だけ。その世界で弟に出会うまでの生き方を、忘れてしまった。今までどうやって生きていたのだろうか。これからどうすればいいのだろうか。どうしていたんだっけ。

また歩みを進める。というのも、ただ足を動かしたただけだ。他にすることが無かった。このまま行ってしまうのか、何をするのか。全く分からないまま、ただ歩く。迷子のように、彷徨う。生きていく上での目的を見失ってしまった。目の前には大きな暗闇が大口を開けて待っている。世界が緩慢に動き出した。

過去の鎖、今の牢獄

出口から外へ出ると、遙か向こうから誰かが近付いてくる足音がした。だが、顔を上げる気力も無く、ただひたすらに歩く。するとその人物が向こうから急にこちらへと声をかけてきた。

「ハーフ。何をしている」

低い声をした親父だった。親父は黒い襟足えりあしの長い髪を風に靡かせて、冷ややかに言い放つ。俺はのろのろと顔を上げ、濁った瞳を親父に向ける。もう罵られても耳に入らない自信は十分にあった。それよりも弟を失ったほうが遥かに辛い。

すると、自分より少し大人びた顔がこちらを見ていた。不思議な目だった。何の感情も見当たらない。そして親父は一度背中にいるレキの姿に一瞥し、吐き捨てるように言った。

「……死んだのか」

「ボス」

「下らんな」

怒りよりも戸惑いが生じた。目を大きく開いて、目の前にいる人物をよく見る。親は子どもを「下らない」と言う存在ではなかった筈だ。少なくとも、これまでそう教えられてきた。かといって親は子を愛する、というのも教えられてはいなかったが、この親は自分の息子をその一言でおさめた。こいつにとつて、俺も所詮しよせんはその程度ということだろう。いや、それよりもこいつはレキのことを何とも思っていないかったのだろうか。自分の息子であるのに、何も感じないのか。

「結局、たった一人死んだだけのこと。それしきの事で泣くな」

「!？」

「代わりはいくらでもいる。いちいち泣いていたら身がもたんぞ」

「くそ親父……っ!」

沸々（ふつふつ）と怒りが湧いてくる。レキの代わりとなる者は

誰一人としていない。仮にそっくりな奴がいたとしても、そいつは俺といたレキではないのだ。それを目の前の男は「代わりはいくらでもいる」と言った。そして「下らない」とも。拳を握り、精一杯怒りを堪えて睨みつける。それでも抑えきれない怒りは声になって押し寄せてきた。

「……何なんだよ。レキの代わりなんているわけねえだろ!？」

珍しく親に反発した俺を見たこの男は、少し眉を寄せて、分からないとでも言うかのように首を傾げる。そこでくると向きを変え、素っ気なく言った。

「……ああ、そうか。お前に面倒を見させたのが、そもその間違이었다か」

「なっ……」

「泣く前に、次のことを考えろ。私が敵なら今のお前を格好の標的にするぞ」

一瞬にして、生きる目的を見つけた。「こいつを殺してやる」。それが今までの本当の生きる目的であり、使命だったのだ。それなら、ここで死ぬ訳にはいかない。こいつを殺すまでは、絶対に。

今は殺すには力不足で、逆にやられてしまうだろう。それならばせめて道連れにしてやる。その時は、必ず訪れるはずだ。だから、その時の為に……。

「何をしている。次の仕事だ」

「……」

憎しみの火を灯し、振り返ることの無い親父の後を追った。いつかその背中を引き裂く為に。

第五話 愚者の告知 1

目を開けるといつもの見慣れた天井があった。あの特徴がある染みが視界に入る。そこでやっと自分の家だと分かった。無意識に拳を作っている右手をゆつくりと開く。じつとりと汗ばんでいた。どうやらうなされていたらしい。汗をかいて火照^{ほて}っている身体をゆつくりと起こすと、アルシャル、シアン、椎羅がそれぞれに行動していた。

椎羅は勝手にテレビをつけて、流行となっているドラマの再放送を見て号泣している。内容はドキュメンタリーので、母親と娘が手を取り合っているベタなシーンだった。アルシャルはというとノートパソコンに向かってにらめっこをしていた。いつになく真剣な表情で、画面を凝視している。額にはうっすらと汗が浮かんでいた。一方でシアンは、最近覚えたという花札で占いをしている。仏頂面^{ぶつちやうづら}で黙々と占いをしている姿はどこか可笑^{おか}しかった。アルシャルと椎羅はともかく、シアンは一体どこからそんな物を覚えてきたのだろう。

三人のあまりにも自分勝手な行動に啞然としていると、台所から詩衣が出てきた。

「お待ちせう。あ。レイ起きたの？」

詩衣は冷蔵庫に入っていた食材で料理をしていたのだろう。食事をのせたおぼんを片手で持ち、空いた片手にはスルメを持っていた。つい先日、つまみにと近場で買ったばかりの品である。

「あ。レイ、お早……あ！ あゝあ」

アルシャルの手元にあるノートパソコンが間延びした音を上げた。どうやらマインスイーパーをしていたようだ。椎羅もその声につられてこちらを見る。既に椎羅の顔は涙と鼻水でぐちゃぐちゃになっていた。詩衣が「ほら、顔拭きなさいよ」とティッシュを数枚渡すと、そこでようやく占いに没頭していたシアンが顔を上げる。相も

変わらず険しい顔だ。気付かないうちに深いため息を吐く。そうしてこの状況で一言呟いた。

「……何なんだお前らはよ」

「それは、こっちの台詞だ」

シアンがいつものようにぶすつとした顔でこちらを見つめる。シアンに見つめられると、何か心の奥底まで見られているようで昔から怖かった。慌ててさっと目を逸らす。別にやましいことはこれっぽっちも無いが、何故だかいたたまれない気持ちになる。

「まあ、まあ。まずはご飯食べよ？」

「お。うまそう!!」

「つたりめーだろ。姉貴のはオレの母さん直伝だからな」

「え。じゃ椎羅のは？」

「親父だよ」

「ああ……」

「……何だよ。その、妙に納得した顔は」

「いや、どうりでって思ってたさ」

「てめえ!!」

「だ、だってそうじゃん。親父さん、家でも指折りの味オンチで……」

「うるせえこの野郎！ ちょっと表出ろやコラァ!!」

椎羅が激しくちゃぶ台を叩き、アルシャルの胸倉を掴んだ。どこかで見た様子だった。そのどこかは思い出せないが。ふとシアンがいた方向を見るが、シアンがいない。あれ、と思い、またちゃぶ台に視線を戻す。

居た。早速茶碗を手にとって、ちゃぶ台に並べられているおかずに手を伸ばしていた。

「二人とも。そういうことはご飯食べてからにきなさい。さ、アル君も席ついて」

「……ん」

「うん！」

いそいそと椎羅から逃れたアルシャルは、シアンの隣に座って同じ様に茶碗と箸を持った。と、そこで椎羅が回り込んでシアンの隣に座る。わざわざそうしなくてもアルシャルの隣も空いてるのに。そう思って椎羅に聞いてみようと言を掛け、閉じた。

そういえば、いつも椎羅はシアンの隣に座ることが多い。時々シアンの横顔をじっと見ていたこともある。以前そのことについて聞いてみたが「うるせえ」の一言で済まされた。以前はそんな様子は一切無かったが、ここ最近よく見かける。どうしたのだろうか。

「何ぼさつと立ってんの、レイ。あんたも座りなさい」

「あ……ああ」

不意に気を失う前のことを思い出し、きまりが悪くなった。と、同時にここにいる奴らに疑問が浮かぶ。

何故、いきなり首を絞めた奴のことを怖がっていないのだろうか。弟のことはアルシャルに、それもまだ生きているときの事しか教えていないのに、何故椎羅が知っていたのか。これは恐らくアルシャルが喋ったからだろう。それは安易に想像できる。

しかし、突然首を絞めた理由は分からない筈だ。理由が分からないと、人は恐れを抱く。よしんば恐れを抱いているのだとしても、大抵の人はこうも親しげには接さない。何故だろうか。

「あ、ようかんゲート」

「あー！ それオレのだぞ、バカアル！！」

「へへー、頂きっ！」

「くそっ！ このヤロウツ！！」

「うわっ！ 刃物禁止！！」

「うっせえ！！」

「二人とももうちつと落ち着いて飯食えよ」

「だって椎羅が」

「ならオレのようかん取んじゃねえ」

「はいはい、ケンカしないの。椎羅も。ほら、ようかんあげる」
「む」

まるで微笑ましいどこにでもありそうな家庭風景だった。いつも本を読んで憧れていた風景が、今ここにある。それでも自分だけが場違いなようだった。というより入ってはいけない気がした。理由の一つに、幼い頃から食事はいつも独りだった、ということもある。それだから余計にこの雰囲気は慣れないものだった。所詮は憧れだ、と諦めていたのに。それがいとも簡単に仲間によって再現されている。まるで演劇のようだ。

「……なあ」

「あとこれっと……ん？ 何、レイ」

幸せそうな顔のアルシャルは、明らかに季節はずれな栗きんとんを頬張りながらこちらを見る。その表情がかえって胸が痛んだ。俺は今一緒にいてくれる仲間を、疑っている。そんな自分が嫌だった。言葉を発するのを躊躇ためらっていると、シアンが空になった茶碗をちゃぶ台に置いてじっと見つめてきた。余計に苦しくなって少し目を伏せる。

「お前ら……俺が怖くないのか？」

瞬間に部屋の中が静まりかえった。取り繕うようにして口を動かす。

「だって、俺は仲間……手をかけちゃったんだぞ。それなのにお前らはいつも通りって顔をして……何なんだよ。怖くねえのか？」

ぎゅっと拳を握った。もう話すのも苦痛になってきた。もしかしたらこの質問は自分が安心を得たいだけに行っているのではないだろうか。みんなの優しさに甘えたいが一心でこんなことを言っているのかもしれない。いや、きっとそうなんだ。俺は安心したいんだ。そんな考えが更に追い詰めていく。心臓が大きく脈打つのが聞こえてくる。

「バカかお前」

シアンが呆れた声を出した。驚いて顔を上げると、シアンはいつものぶすつとした表情ではなく、真剣な顔をしている。

「別にお前がどう思おうが勝手だが、俺は少なくともお前のことを

理解しているつもりだ。お前はいい奴だしな」

違う。

「オレはああいうの慣れてっからどーってことねえよ。それにお前なんか怖くねえし」

違う違う。

「僕なんて出会った時からそれだ。昔と比べたら、丸くなったほうだよ？」

違う違う違う。

「そうそう。私たちを信用するなんて前のあんたなら考えられないもんねー」

違う、違う、違う、違う！そうじゃないんだ。もっと醜いんだ、俺なんて。昔と何一つ変わっていない。だって今もお前らのことを疑っているんだから。いい奴なんてもんじゃない。信用したいけど、それが出来ないんだ。自分自身も信用できない。昔より辛くて、みじめなんだ。そう言いたくてたまらない。だけど、言えなかった。

「……悪い。ありがとな」

右手で胸を押さえて、笑って見せた。こいつらは決して悪気があると言っているんじゃない。本気で心配してくれているんだ。それぐらいのことは分かる。だから感謝の言葉をついた。この汚い本心が見抜かれぬように、嘘を吐く。そうしたら、次第に息が苦しくなってきた。

「あ。煙草切れてたんだっけ」

「じゃあ俺が買ってくるよ」

「いいよ、自分で行くから。てか子供扱いすんなよな」

そう笑って誤魔化すと、悟られないようにいそいそと側にあったコートを着る。そしてその場を逃げるようにして外に出た。その時のシアンの刺すような視線が痛かった。

第五話 愚者の告知 2

「はぁ……逃げてばっかだな、俺」

煙草の自動販売機にコインを入れ、毎度おなじみのボタンを押す。ガコンとこれもまた毎度おなじみの音を聞き、取り出し口から煙草の箱を取り出した。早速その箱を開けて煙草を一本取り出して火をつける。そして煙草を思いきり吸い込んでしまった。

少しの間むせる。やがて乗り気ではなくなり、吸いかけの煙草を携帯灰皿にしまう。やはり煙草はまだ慣れないようだ。顔を上げて、空を見る。どうやら夜が明けて間もない頃のようにだ。空は真っ白で、雲一つない。太陽が赤く燃えている。ここでは太陽が、作られた偽物ではない、本当のものとして存在していた。

近くの土手へ行き、その河原に寝そべった。家にいても、友人といても苦しくなる。しばらくは何も考えたくなかった。しかしそう思えば思うほどそれは困難なことになり、あの日の夢をもう一度思い出してしまった。

もう二度とあんな思いはしたくない。そう思って人付き合いを自ら断ち、人から遠ざかるようにしていた。それなのに。また大切なものがいつの間にか出来てしまったこの現実は何なのだろう。その現実は今として助けにまわってくれたりもするし、逆に苦しめるものともなる。本当のことを言ってしまうえば楽になれるのだろうか、それが言いづらかった。もし、言えたとしても、それは俺を楽にさせるだけで、あいつらには何のメリットも無い。ただの自己満足だ。それで哀れみを受けるのは嫌だった。何より、離れてしまつたらどうしよう、という不安の方が大きい。

「どうしたら、いいんだろうなあ……」

遠い目をして川の向こう側を見つめる。その時だった。隣に誰かが座ったのは。

「呑気なものだな、ハーフムーン」

見知らぬ女性だった。少し大人びた印象で、黒く、綺麗な艶のある長髪をしている。自分より少し年上の少女だろう。しかし、驚いたところはそこじゃなかった。

顔や声が全く同じだった。性別の違いも大して少なく、かろうじて相手の方が少し高い声であるだけで、後は同じだ。空気の温度が徐々に低下していくのが肌を通して分かる。

「あんた、誰なんだ？」

「緊張感の無い奴だな。隙だらけだ」

「答えろ。誰だ」

「……レオだ。オリオンでは屍獅子しかばねししと呼ばれている」

あっけらかんと素性を明かした少女は、レオと名乗った。名前まで一文字ぐらいの違いだ。

「オリオン……」

「忘れたわけではないだろう。シェン・衛遠えおんと言えば分かるか？
ん？」

「何故こんな所にいる」

「さあな、貴様自身に聞け」

「何の用だ」

「分かっているんじゃないか？」

「生憎あいにくとエスパーじゃないんでね」

「察しぐらいはつくだろう」

「まあな」

静寂が河原に訪れ、空気が張り詰める。幸い銃はコートのポケットにある。いつでも抜くことは可能だ。しかし、先程の会話からでもレオという少女は、並みの腕ではなさそうだ。この緊迫した状況を前にして、異様に落ち着き払っている。ただの考えなし、というわけでもなさそうだ。

「どうせ貴様の事だ。現状しか捉えていないのだろう」

「……どういう意味だ」

「忘れるな、シェンとメノウを。あいつらのような超能力者はオリ

オンに腐るほどいる。あいつらは執念深い」

「……あんたは一体何が言いたい？」

「せいぜいお仲間を大切にするんだな」

そう言われてはつとになった。まだあいつらは俺の家だ。もし敵が来ても追い払うだけの力はあるだろうが、大勢で迫られたりしたら苦戦することは必至だろう。焦りを表情に出さずに、何でもない素振りを見せ続ける。

「へえ。俺があいつらを助けに行くって思ってたの？」

「どうかな……私は思わん。が、この前のことだってある」

「フン。ま、どっちにしろ無意味だな」

立ち上がり、身体についた砂埃を叩き落とす。表ではどうにか平常心を保っていられたが、本心では今すぐにでも駆けつけたかった。しかし、ここでそんな素振りをみせれば、あつという間につけこまれてしまう。

「ついてくるか？」

「いや。興味が無い」

「なら何故ここに」

「まだ分からんのか。散歩だ」

レオはつまらなさそうにそう言い放つ。そう言うのなら、そうなのだろう。敵ながら何故か妙に納得してしまう印象がレオにはあった。まるで俺のことを昔から知っているようだ。妙な親近感を覚えて仕方が無い。

ゆっくと土手から離れていき、レオの姿が見えなくなったところで走り出す。背後からは追ってくる気配は感じられなかった。

第五話 愚者の告知 3

数分後に汚いアパートが見え始めた。もうすぐで家に着くはずだ。周囲に敵の気配は感じられない。残るは家の中だけとなった。アパートの階段を勢いをつけて駆け上がる。そして家の扉の前で足を止めた。

呼吸を整え、目の前の扉を勢いよく開ける。もしも襲われていなければ、まだご飯を食べている頃だ。慌てて靴のまま台所を通り過ぎ、リビング兼寝室の扉を開ける。一度だけ心臓が大きくはねた。そこには食事が済んでリラックスしている仲間がいた。怪しい人物は見かけられない。

「お。お帰りー。っておい、靴、靴」

「シアン。今誰か来なかったか？」

「ああ？」

「来てないんだな？」

「お、おう」

「そうか……」

一気に安堵のため息を吐いた。もしかしたらつけられているかもしれないが、とりあえず仲間は無事だったようだ。ふと下を見る。そこでもうやく自分が土足のまま上がっていることに気がついた。

「うわ！？ 泥んこ！」

「へー、レイでもそんなことあるんだねー」

アルシャルがクスクスと笑い、ちやぶ台に頬杖をつく。

しかし、ただ一人、椎羅だけはいそいそとビデオデッキに持参品のビデオを入れていた。ビデオテープには『第五百四十二話 美智子と母の再会編』と書かれている。今椎羅がはまっているというドラマだ。ノンフィクションのようだが、一体どのくらいの間、放送していたのが少しだけ気にかかる。

「ていうかお前、煙草を買いに行くだけにえらい時間かんだな」

「うるせー。いつもの種類が見つからなかったんだよ」

軽い嘘を吐きつつ、靴を脱いで座る。まだ動悸はするが、先程よりは大分落ち着いていた。やはり昔の話はしない方が良さだろう。話せばまた気持ちが悪くなり着かなくなって、自分でも予測のつかない事態になる可能性がある。

「……で。もう平気なのか？」

「え。何が」

「嘘つくんじゃないよ、このダスキン」

「ダスキンじゃねえし。だから何だよ」

すると、背後から鋭い声がした。

「何で、あの時逃げたんだ？」

息が詰まり、反射的にシアンの方を向く。すると。案の定シアンは目を離さずにつつとこちらを見ていた。

目を逸らしたかったが、ここで逸らせば余計に怪しまれてしまう。だから負けじと見つめ返す。こうなればここは我慢比べだ。震える声を喉の奥から絞り出す。

「俺が、逃げた？」

心臓が大きく脈を打ち始めた。その音を掻き消すように、ゆっくりと呼吸を整える。そうして意識を集中させなければ、何かが途切れてしまいそうだった。

「お前さ、俺たちに話してないことがあるだろ」

「べ、別に。何でも」

「言っただろ？ お前のことは理解してるって」

「……」

シアンがじっと目を合わせてくる。その視線に耐え切れず、慌てて逸らす。この我慢比べでは、勝つためしがない。というより、相手の目に映る自分の姿を直視できない。

すると、いきなり背後からビデオを見ていた筈の椎羅が羽交い締めにされた。慌ててその束縛から逃れようとするが、それに続いたアルシヤルに頭に顎を乗せられ、逃げられない。

「放せよ」とは言ってみるものの、どうすれば良いのかも分からない。完全にパニックになっていた。突然のことで戸惑っていると、詩衣もシアンの隣に座ってこちらを見ている。

二人はまるで心の底を見透かすようにじっと目を離そうとしない。はつきりと言ってしまうと、仲間ではあるが、怖かった。何かを言っただけだった二人は微動だにしない。その時に、改めて敵に回したくないと思った。

「言えよ」

「……………」

まさか仲間からこんな尋問をされるとは思わなかった。振り払おうと思えば振り払える。だがそれでは何か大切なものが途切れてしまいそうで、出来なかった。ただ、出来ることと言えば、目を逸らすことぐらいだ。諦めて口を開く。と、同時に溜め息が漏れた。

「……アル。お前弟のことは知ってるよな？」

「うん」

「俺はお前にしか弟のことを喋っていない。何故椎羅が知っている？」

「僕が教えたから」

「何故だ？」

「別に隠す必要がないと思ったからだよ。いけなかった？」

頭上から明るい声がする。その返事に再び深い溜め息を吐く。ややこしいことになった。

少し間を置いて口にする覚悟を決める。心臓がうるさいほどに、激しく脈を打つ。今なら大丈夫だ。少しだけ気持ちが落ち着いている。

たっぷりと息を吹い、一息に吐き出すように言葉を口から出した。

「死んだんだよ。仕事でな」

「え？　だって前は」

「……………」

項垂れて、^{うなだ} 畳の縁を見つめる。あまり思い出さないようにと努め

てみるが、とめどもなく思い出が蘇^{よみがえ}ってきた。小さく頭を振り、黙
り込む。まだ大丈夫。話せる筈だ。

「俺にとっては大事な弟だ。だけど、親父が回してきた仕事で死ん
だ」

「そんなのは、どこにでもあるだろうが」

「更に言えば、俺もその場にいて護りきれなかった。……だから……
あの時、つかつとなって……」

部屋に静寂が訪れ、後悔した。やはり言うべきではなかったのだ。
話したところで、何も解決しない。こんな話をしても困らせるだけ
だ。大体、こいつらも似たような立場なのだ。

慌てて謝ろうと顔を上げると、椎羅が羽交い締めしていた手をほ
どき、か細い声で言った。

「……ごめん」

「は？ ……何でお前が謝るんだよ」

少し躊躇^{ためら}った雰囲気を出す。が、椎羅は少し早い口調で言い返し
てきた。若干声がくぐもって聞こえるのは気のせいだろうか。

「オレ、いつもレイのことが羨ましかったんだ。……お前はさ、ボ
スの息子として期待もされてるし、強いし、家族がいるんだと思っ
てた。オレの両親は……いないから」

椎羅は心の中の何かを抑え込もうとするように拳を握り、項垂れ
る。少し考えてみると、こいつはまだ俺らより子供なのだ。過去に
何があったかは知らないが、楽な生活ではなかっただろう。姉妹だ
けで生きる事を強要され、こいつはその通りに生きようとした。

この仕事でどれだけ心細かっただろうか。普通なら年齢的にはま
だ中学生な筈だ。

「……………」

「でも、オレには姉貴がいる。だから両親のことは忘れようとした
んだ。姉貴がいるから平気だって。でも、いつかお前がオレから姉
貴を……取っちゃうんじゃないかって思ったんだ」

「何言って」

「分かってる！　けど、どうしてもあの時こう思っちゃったんだよ！！　姉貴を返せて」

椎羅のその漠然とした不安は分からないという訳ではない。かつて自分もそう思っていた時期があった。度々（たびたび）弟がどこか遠くへ行ってしまうような気がして、不安になったこともある。

「だから、……ごめん」

「……一つ、聞いていいか？」

「何だよ」

「仲間……でいてくれるのか？」

この言葉を言い出すのは、もの凄く怖かった。が、ここでずっと黙って聞いていたアルシャルが思い切り背中を叩いてきた。威勢のいい音がし、しばらくの間痛みが長引く。反論の声をあげようとすると、すぐに明るい声に掻き消されてしまった。

「ばっかだなあ。そんなこと気にしてたの？」

「な……！！　そんなことって何だよ！！」

「僕はずっとレイの仲間だよ？　何があってもね」

満面の笑みを浮かべたアルシャルは、グッと親指を立ててこちらに笑いかけてきた。詩衣も続けて「当たり前じゃない」と不思議そうな顔をする。シアンも横目でちらとこちらを見る。

こいつは肝心なところでは照れやすい。だから毎回苦勞させられるのだが、こいつは一つ一つの感情にそれぞれ癖がある。それを見て判断するのだが、それが案外難しい。気長な奴じゃないと、身がもたないだろう。

こいつが照れる時はきまって、目を逸らして腕や頬を軽く掻く。

今は頬が赤くなるほど掻いていた。

「……あー。やっぱ性に合わねえや」

椎羅はそう言って、顔を赤くしながらアルシャルと一緒に背中を叩いてきた。一体その小柄な体のどこにこんな力があるのだろうか。そう思ってしまう程に椎羅は叩きまくる。

だが椎羅なりの照れ隠しなのだろうが、先程から叩かれ続けて痛

みが増してくる。それでも気持ちは文字通り痛いほど伝わった。

「痛い痛いって」

「おバカさんにお灸を据えてやってんだよ。ありがたがらなきゃ」
変わらない笑顔で言うアルシャルと、つられて笑い声を出す詩衣が言った。

「そうそう。そのなさけない顔、ちゃんと直してもらいな」

「ブサイクってことか」

「ブサイクじゃないね。女々しいだね」

「この野郎！」

「げ。バカが怒った」

「誰がだコラァ！！」

笑いながら立ち上がり、部屋の中を逃げるアルシャルと椎羅を追かけた。部屋の中は狭かったが、二人は器用に逃げ回る。

するといつの間にか本気で追いかけてまわしていた。

息を切らす中、ふと側にあった消しゴムを握り締め、投げつける。剛速球で投げられた消しゴムはアルシャルの頭に命中し、勢いよく弾かれた。パンと鋭い音がする。

「こんにゃろ！」

負けじとアルシャルも側にあつたものを引っ掴み、こちらへと投げつける。椎羅に至ってはベッドにある枕まで投げ飛ばしてきた。どうにかこうにか避けると、また投げられてきたものを投げ返す。

部屋の中は荒れ、シアンと詩衣がこっそりと外に避難する。が、それにも気付かず、今度は本気で殴り合っていた。部屋の中が更に荒れ、家具が次々と壊れていく。

この数分後、アパートの階下や隣に住んでいるおばさんに怒られたのは、言うまでも無い。

第六話 予測不能なもの

あれから数日が過ぎ、仲間たちはそれぞれ次の仕事場に戻っていた。シアンは東の内乱が勃発ぼっぱつしている地域に、椎羅は西の荒地へと向かった。アルシャルは彼女のいる故郷に。これで当分会うことはないだろう。最後まで残ったアルシャルを空港まで送り、アパートに戻る。

部屋の鍵を開け、扉を開けた。何だか数日前の出来事は全て夢だったような気がしてならない。ようやく家の中に静寂が訪れる。

「さて、と」

仕事で使うコートを羽織り、テレビの前に座った。今、外ではデジタルハイビジョンとやらが流行っているらしい。だが流行に敏感というわけではないので、今あるテレビは地上デジタルに未対応なテレビである。そのテレビのチャンネルを適当に回し、とあるニュースが目飛び込んできた。

ニュースの内容は今日の午後一時に起こった事件のことらしい。事件といっても自分より少し年上の女の子が近場のコンビニで万引きをするという軽いものだった。その容疑者は現在逃走中で、未だに捕まっていないらしい。

「ま、ここも似たようなもんか」

一人そう呟いて、大きな欠伸をする。傍から見れば寂しい奴のようには思われるだろうが、別にさほど気にすることではない。

「眠い……」

窓からは、冬とは思えない陽気な光が差し込んで、眠気を誘ってくる。テレビを消してうとうとと気持ちよさげに眠っていると、突然アパートの外で轟音ごうおんがした。驚いて起き上がり、窓を開ける。

見ると、女の子がアパートの柱にぶつかってのびていた。外見から判断すると、少し年上のような。茶色に染まったショートカットに、短いスカートから日焼けした足が覗いている。いかにも現代っ

子と思わせる出で立ちであったが、幾分か顔が幼い。前髪を上に乗っている。

珍しいこともあるものだ。そう思って窓を閉めようとする。と、その時、その女の子と目が合った。嫌な予感がする。

「あ。すみませーん。あけち荘ってここっすかー？」

「いや、よく聞こえません」

そう言い返して、さっさと窓を閉める。ああいうのとはあまり関わりにならない方がいい。馬が合わないだろうし、面倒だ。しかし、尚も女の子は問いかけてくる。

「すみませーん!!」

しばらく黙っていたが、出て行くまであの女の子はずっとこの調子だろう。しつこいというか、近所迷惑というか。

面倒くさそうに頭を掻き、若干の怒りを込めて窓を開ける。そして次の瞬間に全ての動作が止まった。

目の前で女の子が、いかにも不法侵入しそうな出で立ちで立っている。手にはピッキング用の針金やら鉤爪などがあった。もし警察がここにいたなら、即現行犯で逮捕されるだろう。女の子が窓を開けた音を耳にしてゆっくりと顔を上げる。

「あ、いた」

「な……。何して」

「いやー、いるならいるって言ってくださいよ、もう」

「な、なな何だ何だ何だあんた！ 立派な犯罪だぞ、それ」

「ふうん」

「ふうん、じゃねーよ。大体」

「案外細かいんですね？ ……チビなのに」

その一言で頭の中で何かがブツリと切れる音がした。もう他人だからと言って容赦はしない。

「どういう意味だコラ！ つか見た目で判断すんな!!」

「だからチビなんだ」

「手前え、カリカリに炒めんぞ!!」

「うわ、子供。炒められるんすかあ？ そんな小さいなりでえ」

「いい加減にしろ！ 警察呼ぶぞコラァ！！」

「マジありえませんか。そのシチュエーション。ありえなくね？」

「どう見ても普通だろうが！」

「これでもっすか？」

女の子はそう言って、着ている上着に手をつ突っ込む。すかさず反射的にズボンのポケットからジャックナイフを取り出した。ためらうことなく女の子の眉間に向ける。

別に銃でもよかったが、いきなりそれを出しても、命中率が低かったりして外したりでもすれば問題になる。接近戦にはこういったナイフなどが丁度いい。

第一、今は真昼間である。今ごろはどこぞの会社員や一般市民はお茶をしている時間帯だ。そんな中銃声がすれば、たちまちの内にこの部屋が怪しまれてしまう。

「おりよ？」

「どっかでチンケな犯罪でもしたんだろうが。両手をゆっくりと上げろ。ついでにその手に持っている銃も捨てな」

「何か刑事みたいっすね。かつこいー」

「しらばっくれんな。万引き犯としてでかでかと顔を映し出されてたよ。その間抜け顔」

「……………」

女の子は渋々といった様子で銃を地面に放る。それを見てすかさず足で銃を引き寄せた。いつ、どこで何が起きるか分かったものではない。念には念を入れておかなければ。

「さて、と。用件は？ まさか何も無しにここへ来たということも無いだろ？」

「知りませんねえ」

「見当はつくけどな。大方でかい所から雇われてきたか、殺しに来たか」

「はくずれっ！ 偵察程度っす」

「……随分と楽しんでるみたいだが」

「あんたにあたしは殺せませんからねーっだ」

「……甘く見られたもんだ、俺も」

そう言うが早いのか、持っていたジャックナイフを女の子に向けて放つ。すると女の子は、その攻撃を予測していたかのように、仰け反ってそれを避ける。

その様子を見てから、すかさず服の袖に隠していた消音銃で女の子の肩を撃った。その子の着ている上着がみるみるうちに鮮血に染まりあがる。

が、女の子は怯みもせずに落とした銃に手を伸ばした。素早くその手の平を撃つ。今度は短い悲鳴が聞こえた。

「意気込みはいいな」

「くっ……」

「で、後ろは何だ？ オリオンか？」

「……」

「まあいいや。それより、何であいつら揃って俺を狙ってくるんだ？ 仲間にできなかったからか？」

「……。あんた、本当に覚えが無いんすか？」

「だから、何が」

「忘れた訳じゃないっしょ？ 弟くんの行方を」

体の奥底から、何かがぞわりと這い上がって来る。気分が悪く、腹の底から吐き気がせり上がってくるのを感じた。必死にそれに耐えるようにして、会話を続ける。

「弟が何だよ。関係ねえだろ」

「大ありなんすよ。だから追っているのに。……馬鹿な、いや変わり者」

「何でそこを訂正した？」

「大したことじゃないっすよ。あ、それともナイスツツコミと言われたかったんすか？」

「……何でもない。で、何で弟が？」

「疑ったことは無いっすか？ 弟くんは、本当に血の繋がった兄弟なんかって」

「あんたらの組織の信条は知らねえが、うちでは絶対だからな。疑うことは許されない」

「……へえ。なら知らなくて当然、ということっすか」

「だからもったいぶってんじゃねえよ。また風穴開けるぞ」

苛立ちを抑え切れずに声を荒げる。やはりこいつとは馬が合わないようだ。

安全装置を外し、引き金に指をかけた。狙った先には敵の眉間がある。そこで少し慌てた声が出た。

「ま、待って待って。今話しますってえ！」

「じゃあ早くしろよ」

「せっかちな人っすね。モテないっすよ？」

「敵地でバッシングとはなかなか肝が据わってるんだな、あんた」

「へへー、どうも。……実は弟くんはあんたの」

そこで言葉は宙を舞い、永久にこの世には戻ってこなかった。

二発の弾丸が、女の子の体内へと飛び込み、胸部が破裂した。血が勢いよく噴出し、部屋の壁を赤く染めていく。そして畳に女の子の身体が転がり、黒くなった血が染み付いた。女の子は目を見開き、言葉にならない言葉を発していたが、それもすぐに止む。

すかさず体勢を低く構え、弾丸の出所を押さえようとする。しかし、発砲音も無ければ足音もない。無の世界となっている。

慌てて窓から見えない位置に座り込むと、右手に銃を握り締め、開いた片手で弾を詰めていく。どうやら常人ではなさそうだ。

オリオンは何故こうもつけまわしてくるのか。した事といえば、仲間になることを断ったぐらいだ。

役に立たないなら殺す。

そういう考え方も可能ではあるが、それにしてもあまりにも余裕

が無さ過ぎる。オリオンとはあのマスターが知っていたほどの巨大な組織らしいが、これほどまでに人材に欠けているのだろうか。それに、オリオンについての情報が入った話も聞かない。あの敵であるレオという少女も「超能力者はオリオンに腐るほどいる」と言っていた。

となれば、矢張り先程途切れたあの話の方が有力そうだ。一体弟とオリオンに何の関係があるというのだろう。言いかけた言葉の先も気になる。

「……何にせよ、このままやられっぱなしじゃ性に合わねえや」

どうやら追っ手はここまでのようだ。気配を探ってみるが、何も無い。安堵の溜め息と銃を降ろした。

ふと女の子が倒れた所を見ると、その場所を凝視する。女の子の死体は跡形もなく消え去っていた。微かに吹いた風が、粉っぽい灰を空へと連れ去る。死因は銃殺だ。それは見間違え様が無い。しかし目の前の灰は、明らかに焼死した人間が出すものだった。しかし側に火気類は見当たらない。

「……まさか」

あまり考えたくは無かったが、新手の能力者である可能性が高い。自然と舌打ちをし、今後の事を考える。

ここは無難にマスターに話を聞いた方がいいだろう。しかし追っ手が遠く離れた所でまだこちらを監視しているのだとすれば、迂闊には外に出られない。かといってこのまま家に籠っていても何も始まりやしない。あの女の子を正確に撃ったのだからこちらの場所はどうにバレている。

「考えるより飛び込め、か」

パンッと両手で顔を叩く。昔誰かが言っていた言葉を呟いて、真相を知っているであろう、叔父の下へと向かうことにした。

それには先ず、窓を閉めて、ガスの元栓をチェックする。そして炊飯器のタイマーをセットし、仕事着ではない、出来るだけそこらにいる若者が着ている服を選ぶ。ようやく部屋を出たのは決心して

から三十分を過ぎた頃だった。

停めてあったオートバイに乗り、急いでバーへと向かう。それでもいつものバーへの道が今日に限って長く感じられた。信号を半ば無視する勢いで、人通りの少ない角を曲がる。そうして降りるのと同時に入り口まで走った。焦っていた為、引いて開けるドアを何度も押して更に焦燥感を掻き立てられる。ようやくそのことを思い出して勢いよく引くと、扉はいとも簡単に開いた。

「マスター。話がある」

バーに入るなり、他の客の目も気にせずに言葉を発する。マスターは変わらずに穏やかな表情でレイを見ている。そしてくだらない会話を交わしながら、カウンター席についた。

辺りをグルッと見回すと、ここにいる客はそこその人数だ。といっても、同じ屋根の下に居るような奴らが客である。いよいよ儲かっていないらしい。当然のように一般市民の客は誰一人としていない。

「いらっしやい、ハーフムーン。レム」

「レムじゃねえよ。俺はどこぞの死神か。……しかも女だし」

「はっはは、詳しいな」

「流行ったからな、ここでも」

「ああ、そうだっけ。スクラッチさんなんかわざわざキャンパスノートを真っ黒にして持ってきてたな。ハーフがそこに速攻でスクラッチさんの本名書いてたっけ」

「……何でそんなことはいちいち覚えてんだよ。まあ、いいや」
体をカウンターに乗り出し、目を鋭くさせる。

「それで。何を聞きたいんだい？」

「オリオンのことだ」

瞬間に空気が張り詰めたようになる。だが、一瞬のことだった。すぐにバーはざわめきはじめる。後ろから他愛も無い話が聞こえてきた。

誰もが一度はこんな場面に出くわすだろう。例えば学校のお昼休

みや気まずい雰囲気などで、誰かの発言によりその場が一瞬静かになり、またざわめき出す。或いはそのまま沈黙が続き、誰かがそれを破ってくれることを願うままその時間が終わる場面はよくある。今のは前者の方だった。

しかし、空気は未だに妙に張り詰めている。気にせずにマスターの方を見た。

「何か知ってること、あるだろ？」

「……悪いが、知っていることは俺たちの組織に近い大規模な組織だということだけだ」

「……そうかい。なら、そいつらは一体何で儲けた？」

「それも知られていないんだ」

「……分かったよ。ありがとな」

ちらと周囲を窺うマスターの反応に気付き、瞬時に悟る。どうやらこの殺気に近い空気からして、身内も危ないらしい。オリオンについて何も言っていない、と上から言われているのか。それとも身内と敵は内通していて、知られたらマズいことになるのか。立派な犯罪は共にしているくせに。

「んじゃ、今度は何かジュースでも用意しておいてくれ」

軽くそう言い、店を出た。その数十秒後、店の扉が開く音がする。続いて後ろを付いてくる気配は三つ。

「どうしたもんかね」

器用に人混みの中を避けて行き、適当に撒いてみる。この動作にも慣れたものだ。しかし撒いてはみたものの、行く当てはない。仕事の方はしばらくの間待機命令が出されている。家に帰りたいのはやまやまでもあるが、まだ敵がうろついているかもしれない。それでもここも十分危険だ。

不意に聞き慣れた自分の声が聞こえ、慌てて携帯電話を耳に当てる。最近気付いたこいつへの対処方法だ。これなら周りにも怪しまれない。

『本当、つまんねー人間だな。おめーって』

「やかましい。余計なお世話だ」

『ボクちん友達いないのゝってか。ギャハハハ!!』

「悪かったな。ヒッキーで」

『ギャハハハハハハ! ヒーッヒヒヒヒ!! 腹痛い、腹痛い!
!』

「相変わらず腹立つ奴だな、お前」

『ギャハハッ。あ。でも外にいるんだからヒッキーじゃねえな。チ
ッ』

「何だよその凄い残念がりかた」

『つまんねえんだもん』

「俺をからかってどうする」

『ギャハハッ。だって声が聞こえるのっておめーだけだし』

信号が赤になり、バイクを止める。そして疲弊した息を吐き、空を仰いだ。空はどんよりとした雲が広がり、今にも雨が降りそうだとすると本当に携帯から電話がかかってきた。画面には匿名希望という文字が浮かび上がっている。仕事だ。舌打ちして通話ボタンを押した。

「……」

「次の仕事だ。アエシュトシティK-5で依頼人から直接指示があるからそこへ」

「……了解」

溜め息と共に携帯電話の電源を切る。最近は次から次へと仕事が回ってくるな、と一人呟く。元々こういう仕事は依頼が少なく、寧ろ仕事があること自体が珍しい。待機命令を出されてそのまま二年という事も珍しくはない。だからより多く仕事をこなした者が評価が上がり、ここで生きていけるということだ。

しかし、普段ならこういった仕事はマスターを通じての筈だ。初めて仕事をした時から、厳しくマスターに言われている。それ以外は重要なことだから、あちらから連絡が入るような仕組みになっているのだそうだ。だとすると、それほどまでにこの仕事は重要とい

う事だろうか。

「手持ちは……銃とジャックナイフだけ、か」

『ヒヤハハハハッ。おうちに帰らないとパパに怒られましゅよ？』

「やかましい」

安全な場所など、もうどこにもない。それは初めて人を殺した時から分かっていた筈だ。引き金一つで簡単に人の人生を奪う銃を恐れながら、無理矢理自分を納得させてきた。「これが俺の運命だから仕方がない」と言い訳して、多くの人を自分が生きていたいがために殺してきた。

まだ死ねない。目的を果たすには、生き続けること。そのことがどれだけ大きな罪を背負うものだとしても、どれだけ多くの人を殺めるものだとしても、止めるつもりはない。少なくとも、目的を果すまでは。

俺の一生をかけてあいつを否定してやる。しかし、それだといずれ仲間とは必然的に俺を裏切ることになる。親父を敬い、護り続ける仲間を俺が裏切るのだから。長い付き合いである仲間はこぞって殺そうとしてくるだろう。俺が唯一信頼できる仲間もきっと殺しに来る。だが、そのことは弟が死んだ時に覚悟した筈だった。

心が休まる場所など、とうの昔に失ったのだ。拳を握り、また空を仰ぐ。そして唯一心を許せる存在の名を口にした。

「レキ……」

あの時、あの女は弟を疑うようなことを言ってきた。しかし、今更血が繋がっているのかどうかなどは問題ではない。血が繋がっていなくとも、あれは弟なのだ。この世でたった一人の存在で、何者にも代えることのできない弟。俺はその弟の為にも、目的を果さなくてはならない。やらなければ。

『……おい。ブラコン』

「うるさい」

『氣いっけな』

「ああ……？　気持ち悪いな」

『……………』

「何なんだよ」

思わず自分自身に聞き返した。まさかこいつからこんな台詞を聞くとは、夢にも思わなかった。戸惑いよりも、驚きの方が強い。

不意に胸騒ぎがして、身体がぐらつく感覚を覚える。以前にもこんなことがあった。身体が危険を予告しているのだ。しかし、一体何が危険で、何が起これるというのだろうか。もう一度だけ空を仰いだが、何の答えも浮かばなかった。

ビー玉に語ること

そこは全面ガラスの窓で外との隔たりを作り、中央に何の変哲も無いただの机と椅子が存在する部屋だった。それと外を繋げているのは、何の装飾も施されていない質素な扉と、その真正面にある大きな窓だけだ。その大きなガラス窓に、男の姿が映っていた。

艶のある黒髪を襟足まで伸ばし、口元には薄っすらとした笑みがある。目つきは悪く、その姿はどこか子供じみていた。それに平均の男性より幾分か背が低いことが、さらに子供っぽさを強調していた。

恐らく初めて会う人はその男を大人だとは気づかないだろう。無愛想な子供が、そのまま成長した。そんな感じである。だから、最初は誰一人として男がこの組織の首領だとは思わなかった。しかし、その男には威厳が備わっていて、親しさよりも寧ろ敬遠さを感じさせる印象を持たせる。何よりも、実力や人徳がそれを証明していた。不意に男の背後の扉から、ノックの音がする。するとその男は、新しい玩具を待ちかねていた子供のよう^にに勢いよく振り返った。

「失礼します」

外から、二人の男が入ってきた。前に居る男は左目に傷を負っていて、生々しい切り傷がそのまま残っている。しかし、態度は見た目以上に落ち着いていて、非常に大人びていた。

この大人びた男は、今までこの組織で新人を指導する役目^をを^せっていた所^を為^をか、疑り深いそいつの信頼を得ている、数少ない者の一人である。

一方で後ろに控えている背の高い男は、前にいる男とは対照的に、視線を彷徨わせてどこか落ち着きが無い。動作も初々しく、ぎこちなかった。まるで気の弱い熊のようだ。

男がそのぎこちない奴に目を止めて、鋭い目つきで睨みあげる。するとその視線に気がついた熊のような男は、小さく息を吞んで身

体を強張らせた。男はそのまま熊を見る。熊が怯えているのは一目瞭然だった。やがてその男はつまらなくなったのか、前に居る男に視線を戻す。

「ボスに報告致します。……任務番号7814は成功。サンプルのデータを回収。ともにオリオンと接触しました」

「そうか」

「……あれもまだ気付きはしない。が、嚴重な警戒にあたれ」

すると、前に居る男が半ば安堵するような表情になった。かつての教え子が標的となるのは気が引けたのだろう。しかし男が「了解」と続けようとすると、その男は一気に宣告した。

「再びオリオンと接触するようなことがあれば、消せ」

後ろの男がびくりと身体を震わせ、前に居る男は息を呑んだ。慌てて取り成すように口を挟む。

「……お言葉ですが、あれにはまだ利用価値があります。もう少しお考えになられた方がよろしいか、と」

すると、滅多に笑みを浮かべることの無いその男は、またいつもの調子の無愛想な顔になり、じっと目の前の男を凝視した。そいつはいつも分からない事に遭遇すると、決まってその分からないものを見つめる。そして、男は考える。何故、そうなるのか。原因を突き止めようとする。どこで、自分と考えを違えたのかを。

「スクラッチ」

前に居る男の名前が呼ばれ、男がそれに返事をする。そうして、男の目を見ながらとうとうと話しかけた。

「お前はあれを何だと考えている？」

「……と、申しますと」

「あれは俺の息子だ。たとえば、別の人格があらうとも、誇りだとも思っている」

「それが、……何故？」

「奴の力の限界を知りたい」

「力の……？」

そいつは小さく頷き、窓の方へと歩み寄る。最早二人の男などその目の眼中には無かった。

「俺は不死身というわけじゃない。それは奴も同じ事。ならば、俺は奴のそれを引き出してやりたい。もう既に動力も用意してやった。後は奴の力を引き出せばいい」

「つまり、ハーフムーンは強者だ」と

スクラッチがそう言うのと、その男はそのままの姿勢で一人呟き続ける。完全に自分だけの世界に籠こもっていた。スクラッチが訝しげにボスを見る。

「奴は強い。しかし、今のままでは弱いまま。道を用意してやらねば。奴は……人に近づきすぎるから、弱い。俺を楽しませてくれるのは、奴だけだ。いつか奴は俺の前に現れる。その為にも強くさせなければ……」

スクラッチは後ろに居る男と視線を交わし、部屋を出るように促した。スクラッチは知っていたのだ。これは、ボスが部下を眼中に入れていないという、合図であることを。

最初はスクラッチも最後まで残って聞いていたが、何時間とした後になって初めて声がかかっただけだ。それ以後、スクラッチはこうなった時は退室するようになった。別にそのことでボスは責めたりなどしなかったし、追及することも無かった。

部屋に扉が閉まる音が響く。しかし、部下が出て行った後も、その男は呟いていた。

「なあ、シェア。お前もそう思うだろう？」

机の上に置いてあるビー玉を持ち上げて、月の光にかざす。淡い藍色をしたビー玉は、その身に月の光を宿し、仄暗い室内に光を入れた。そのビー玉は彼の妻から贈られてきた物だった。彼女と同じ瞳の色のビー玉を、慈しむようにそっとその輪郭をなぞる。

「まだこっちにも楽しませてくれそうな奴がいるんだ。もう少し待っていてくれ」

そう呟いてからゆっくりと机に歩み寄り、写真の隣に置く。かつ

てシェアと家族で撮った写真だ。シェアは椅子に腰掛けて小さな男の子を抱いている。一方で男は少し困った顔で、小さな男の子とそっくりな女の子を抱いていた。

あの事件が起きるまで、俺たちは幸せだった。そいつがそう思った途端、部屋に着信音が響いた。この着信音はあまり聞いたことが無い。通話ボタンを押す。

「何だ」

「ボス……いや、カリラ」

「ほう。我らの縁の下、我が弟のロウ、か」

「……ハーフムーンに緊急措置をとった、というのは本当か？」

「俺は嘘を吐かない」

「……そうだったな」

「案ずるな。お前はバーの手入れをしていればいい」

「ならばそうしよう。だが、カリラ」

「ん？」

「あまり行き過ぎるな」

カリラの口元に自然と笑みが張り付く。

「お前はなんら変わりはないな。俺はこんなにも変わってしまったというのに……面白いほど変わっていない」

弟は昔から後ろでそいつのすることを眺めては口出しをしていた。それなのに止めようとはしない。本当に見ているだけだった。こいつは兄とは反対の道を歩みつつ、なおかつまとわりついてきた。臆病者だ、と罵っても平気な顔をして付いてくる。決して遠ざかろうとしない。そんな弟の考えていることは、カリラにはいつも分からなかった。カリラよりもよっぽど大人に近かったからだ。

だから余計に弟が嫌いだった。弟がまともにこの男を兄と呼ぶ事が無かったこともある。腹いせに嘲るように話しかける。

「クク……出しゃばる気か？」

「そんなつもりじゃない。思ったことを言っただけだ」

「口は災いの元だと言うよな」

「言わなければ気がつかないだろう？」

「……今更後悔しても、遅いぜ？」

そう言い放ってから電話を切った。カリラは苛立ち紛れに電話機を床に叩きつける。子供が気に食わないとき物に当たるように、カリラもそうした。それでも腹立たしいのを堪えきれない。

ふと机の上に佇^{たたず}んでいるビー玉が目がいった。カリラはそつと持ち上げ、じっと見つめる。そして今度は何も言わずに、そのまま握り締めた。

「あと、もう少しだ……」

全てが変わってしまったあの時の償いが出来る日は、もうすぐそこまで来ている。今更引き返すことは出来ない。何が何でもやらなければならなかった。誰にも邪魔はさせない。

息子を殺さなければ、償いは果せないのだ。

———全てはシェアのために。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7911b/>

半分の月の下で

2010年10月8日14時35分発行